

富山市埋蔵文化財調査報告47

た ち ほ ん ご う
富山市館本郷Ⅱ遺跡
発掘調査報告書

— 経営体育成基盤整備事業(県営)は場整備)高善寺地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) —

2012

富山市教育委員会

た ち ほ ん こ う
富山市館本郷Ⅱ遺跡
発掘調査報告書

— 経営体育成基盤整備事業(県営は場整備)高善寺地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) —

2012

富山市教育委員会



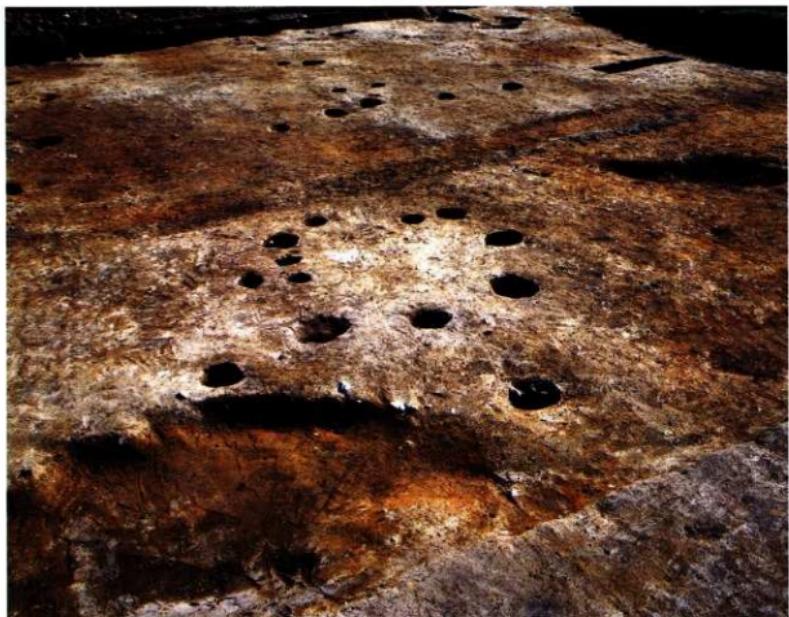
上 = 調査区遠景（南西から） 下 = 調査区近景（北から）



上=S B 20 完掘（東から） 下=S P 18 遺物出土状況（東から）



上 = S D 46 完掘（北から） 下 = S D 46 須恵器出土状況（東から）



上 = 挖立柱建物 S B 104 完掘 (北東から) 下 = S K 63 遺物出土状況 (東から)

例　　言

- 1 本書は、富山市八尾町高善寺^{こうぜんじ}地内に所在する館本郷Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、経営体育成基盤整備事業（県営は場整備）高善寺地区に伴うもので、富山県富山農林振興センターから委託を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。
- 調査費用は「農業基盤整備事業などにかかる農林省と文化庁の覚書」第5項に基づき、農家負担分について、富山市が文化庁所管の国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
- 3 現地調査期間、出土品整理期間、調査面積、調査担当者は次のとおりである。
- 調査期間　現地調査　平成23年6月16日～平成23年9月30日
　　出土品整理　平成23年10月1日～平成24年3月19日
- 調査面積　1198.7m²
- 調査担当者　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員　細辻嘉門・同嘱託　三上智丈
　　・同嘱託　新川廣久・同嘱託　納屋内高史
- 4 調査にあたり、高善寺地区区長をはじめ、井田川沿岸土地改良区及び地元高善寺地区のご協力を得た。記して謝意を表します。
- 5 自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所に委託し、その成果は本書「第IV章　自然科学分析」に掲載した。
- 6 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 7 本書の執筆・編集は、三上・新川・納屋内の協力を得て細辻が行った。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標は国土座標VII系に準拠した。方位は真北、水平基準は海拔である。
- 2 土層説明、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準上色帖　1995年版』に據る。
- 3 遺構記号は、掘立柱建物：S B、溝：S D、土坑：S K、ピット：S P、を用いた。
- 4 図中の網掛けは、以下のとおりである。

地山



白磁の断面



須恵器・珠洲の断面



目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1 ~ 2
第1節 調査にいたる経過	
第2節 発掘調査及び整理等作業の経過	
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2 ~ 3
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第Ⅲ章 調査の方法と成果	8 ~ 17
第1節 調査の方法	
第2節 基本層序	
第3節 遺構	
第4節 遺物	
第Ⅳ章 自然科学分析	18 ~ 19
第Ⅴ章 総括	20 ~ 22
引用・参考文献	22
報告書抄録	47

挿 図 目 次

図 1 10市計画図及び遺跡所在範囲図	4	図 2 試掘トレンチ位置図	5
図 3 周辺の道路分布図	6	図 4 調査区位置図	7
図 5 陸地測量部の迅速図(明治43年発行)上の調査対象地位図(S=1/25000)			7
図 6 集落分布の推定図	21	図 7 SB20断面透視図	22
図 8 遺構配置図および層序模式図	23	図 9 SB20平面図・エレベーション図・断面図	24
図 10 SB20断面図、SK63・SK97平面図、遺物出土状況図・断面図			25
図 11 SD46平面図および断面図	26	図 12 SB104平面図・エレベーション図・断面図	27
図 13 遺構平面図および断面図(1)	28	図 14 遺構平面図および断面図(2)	29
図 15 遺構平面図および断面図(3)	30	図 16 遺物実測図(1)	31
図 17 遺物実測図(2)	32	図 18 遺物実測図(3)	33
図 19 遺物実測図(4)	34		

表 目 次

表 1 遺構一覧表(1)	11	表 2 遺構一覧表(2)	12
表 3 遺物観察表(1)	15	表 4 遺物観察表(2)	16
表 5 遺物観察表(3)	17	表 6	19
表 7	19		

写真図版目次

図版 1 航空写真	35	図版 2 調査区全景	36
図版 3 据立柱建物完掘	37	図版 4 SB20検出・断面	38
図版 5 SD46 遺物出土状況・断面	39	図版 6 SD46 完掘	40
図版 7 SB104 完掘	41	図版 8 SK63・SK29 完掘	42
図版 9 遺構出土遺物写真	43	図版 10 包含層その他出土遺物写真(1)	44
図版 11 包含層その他出土遺物写真(2)	45	図版 12 出土遺物写真	46

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査にいたる経過

館本郷II遺跡（図3・1）は、平成11年度に八尾町教育委員会（当時、以下八尾町教委）が実施した分布調査で翠尾I遺跡から独立して新規設定され、遺跡No.361068として登載された。

平成18年6月、富山県富山農地林務事務所（当時：現富山県富山農林振興センター、以下富山農林）から富山市教育委員会（以下富山市教委）に、八尾町高善寺寺内の県営ほ場整備事業について協議があった。事業地40.2ha（402,000m²）の一部が館本郷II遺跡に含まれる（図1）ため、平成19年～21年の3年間で試掘調査を実施することとなった。

初年度の平成19年度は、経営体育成基盤整備事業高善寺地区が事業採択されたこともあり、細部協議のうえ、高善寺地区と上高善寺地区にわたる61,861m²を対象として試掘調査を実施した。試掘調査の結果、国道472号線の西側8,750m²で奈良・平安時代の溝・土坑などを検出し、土師器・須恵器・中世土師器・青磁・瀬戸美濃などが出土した。遺跡の所在範囲は7,350m²である。

平成20年度は、高善寺地内の6,790m²を対象として試掘調査を実施した。その結果、弥生時代の土器溜まり・溝・余良・平安時代の溝・ピットなどが検出され、弥生土器・土師器・須恵器・珠洲・中世土師器・近世陶磁器などが出土した。遺跡の所在範囲は750m²である。

また、上層に中世の遺物包含層、下層に古代の遺物包含層を確認した910m²については結論を保留し、翌年度に隣接地で追加の試掘調査を行って、その結果を加味して遺跡の所在範囲を確定することとなった。

平成21年度は、高善寺地内の8,400m²を対象として試掘調査を実施した。その結果、奈良・平安時代の溝・土坑・ピット・中世の溝・土坑を検出し、土師器・須恵器・珠洲・近代陶磁器が出土した。遺跡の所在範囲は3,160m²である。

なお、平成20年度の試掘調査で結論を保留した部分については、一部で上層に中世、下層に奈良・平安時代の遺跡の所在を確認した。このため、遺跡所在範囲は1,680m²、遺跡所在範囲は延べ2,730m²に確定することとなった。

3年間の試掘調査の結果、最終的に合計13,240m²に遺跡の所在が確認された。

また、試掘調査により遺跡が当初設定した埋蔵文化財包蔵地範囲より西側に広がることが確認されたため、埋蔵文化財包蔵地範囲拡大の変更手続きを行った。このことにより埋蔵文化財包蔵地の面積は227,250m²となった。

遺跡の所在が確認されたことから、協議により平成22年度に用排水部分2ヶ所331.9m²の発掘調査を実施した。〔富山市教委2011〕

また、当初水田全体は遺跡保護のため山面調整をおこなう計画であったが、田面調整による造構の保護ができない水田1198.7m²について平成23年度に発掘調査を行うこととなった。

協議に基づき、平成23年5月19日、富山県と富山市の間で埋蔵文化財発掘調査委託業務契約を締結した。履行期限は平成24年3月19日である。

文化財保護法94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、富山農林から平成23年5月30日付け富振第484号で富山市教委へ提出され、富山市教委の副本を付けて平成23年5月31日付け埋文第31号で富山県教育委員会へ提出した。

文化財保護法99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告は、富山市教委から平成23年7月4日付け埋文第31号により県教委へ提出した。

第2節 発掘調査及び整理等作業の経過

発掘調査は平成23年6月16日から表土掘削作業を開始した。表土掘削作業完了後6月22日から人力による包含層掘削を開始した。包含層掘削作業と併行して、遺構検出作業・遺構掘削作業を進めた。掘削作業と並行して隨時写真撮影・トータルステーションを用いた測量・図面作成作業を行った。9月6日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、9月7日に高所作業車を使用して全景写真撮影を行った。現地調査は9月30日に完了した。

遺物整理・報告書作成作業は現地調査終了後、埋蔵文化財センターで実施した。作業内容は遺物洗浄・注記・接合・復元・実測・トレースの他、報告書原稿執筆・図版原稿作成・遺物写真撮影である。

平成24年3月19日に本書を刊行して業務を完了した。

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

館本郷Ⅱ遺跡は富山市八尾町館本郷・高善寺地内に所在する。富山市の大部分を占める富山平野は富山県中央部に位置し、北は富山湾、東端は早月川扇状地、西端は呉羽山丘陵に接し、南端は飛騨山地から続く丘陵に面する。富山平野の地形は全体に南から北へ向かって緩やかに傾斜しており、神通川とその支流が形成した扇状地の発達が顕著である。

遺跡は富山市南部を占める八尾地域に位置する。八尾地域の地勢は、地域の8割を占める山間部と平野部に大別され、南が高く、北が低くなるという地勢を示しているが、大部分は低い丘陵地で占められている。地域の南端は標高1,638mの金剛堂山を主峰とする1,500m級の山々が連なって、岐阜県と接し、飛騨山脈へと続いている。その山脈に源を発する室牧川、仁歩川、野積川、久婦須川、別荘川などの河川が断崖山地を開析して、流域の山麓、山腹に段丘平野を形成しながら北に流れる。それら河川は八尾の中心市街付近の丘陵でまとまって井田川となる。井田川は、何度も流れを変えながら地域の北東部を占める扇状地を形成し、神通川と合流する。

八尾地域の遺跡は、山間部の河岸段丘上に旧石器時代や縄文時代の遺跡が多く、平野部の微高地上に弥生時代から近世の遺跡が多く分布する、という傾向を示す。

遺跡は富山湾から南に18km内陸に入った井田川と鉢川に挟まれた扇状地上に立地し、東西約400m、南北約600mの範囲に広がる。遺跡の東部には国道472号線が南北に通り、遺跡西端は鉢川と接する。遺跡東端から400m離れて井田川が北に流れる。遺跡一帯は遺跡の南端と北端は集落があるが、大部分は水田が占めており、明治43年発行の迅速図（図5）を見ると、土地利用はその頃から変化がないと推測される。

今回の調査地は遺跡の南端に位置し、調査地周辺の標高は43m前後である。

第2節 歴史的環境

館本郷Ⅱ遺跡では、平成8年度の発掘調査で、弥生時代終末期と奈良・平安時代の2時期の遺跡が確認されている。下層では弥生時代終末期の土器窓まり3ヶ所・掘立柱建物1棟・土坑1基・ピット多数が検出され、土器窓まりから祭式土器が大量に出土した。集落の境界において恒常に祭祀を行っていた痕跡ではないかと推測されている。上層では奈良・平安時代（8世紀前半～10世紀前半）の掘立柱建物3棟・棚状構造1・溝及び土坑が多数検出され、集落の東南隅の一面に相当すると推測されている。〔八尾町教委1997a〕平成22年度の発掘調査では、弥生時代～近世まで断続的に続く集落

を検出した。〔富山市教委 2011〕

周辺の遺跡としては、翠尾 I・南部 I 遺跡（図 3・2）がある。本遺跡の北方、井田川左岸の扇状地上に帯状に広がる弥生時代～近世の複合遺跡である。婦中町教委と八尾町教委による数次にわたる発掘調査で、弥生時代終末期の竪穴建物・古墳時代前期の竪穴建物、奈良時代の竪穴建物や奈良・平安時代の竪穴建物・鍛冶遺構、中・近世の集落が確認されている。

翠尾 I・南部 I 遺跡の範囲内に所在する田中館跡（図 3・3）は、本遺跡の北 1km にある西円寺周辺に広がる城館跡である。田中保を領有した豪族田中市正四郎が、婦中町熊野道から移住して構えた居館跡として伝えられている。市正が田中保を領有した時期は不明であるが、その後館本郷に移り、明応 2 年（1493）か 3 年（1494）ごろに越後上杉氏との争いで戦死したと伝わる。

ほ場整備に先立つ発掘調査では 12 世紀後半～15 世紀の掘立柱建物・井戸・溝・土坑を確認し、珠洲・中世土師器・青磁・瓦質土器・漆器などが出土しており、田中氏居館の一部と考えられている。

また、井田川沿岸では、特に呉羽山丘陵沿いの扇状地や低位河岸段丘上において、弥生時代から中世にかけて多くの遺跡が集中することが明らかになってきている。〔婦中町教委 2002・2003〕

井田川右岸標高 120 m の宮崎丘陵頂部には弥生時代後期後半には、高地性集落である富崎赤坂・離山砦遺跡（図 3・4）が出現し、弥生時代終末期の西隅突出型墳丘墓・集落・古墳時代前期では県内有数の規模の前方後方墳である勅使塚古墳（図 3・12）・王塚古墳（図 3・13）や富崎千里古墳群（図 3・14）が集中して分布する。

これら弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺跡群のうち、王塚古墳・勅使塚古墳・千坊山遺跡（図 3・5）・六治古塚墳墓（図 3・6）・向野塚墳墓（図 3・7）・富崎墳墓群（図 3・11）・富崎千里古墳群の 7 遺跡は、地域の弥生時代から古墳時代への移り変わりを示す北陸の代表的な事例であると評価され、平成 17 年 3 月「王塚・千坊山遺跡群」として国史跡に名称変更・追加指定された。

平成 8 年度に本遺跡で検出された弥生時代終末期の遺構も「王塚・千坊山遺跡群」と同時期であり、それらの遺構は首長クラスの集落に根差す祭祀場と推測されていることから、史跡との関連が伺える。

古墳時代後期の遺跡には、二本榎遺跡がある。富山市教育委員会による確認調査で、6 世紀後半～7 世紀初頭の直径 14 m の円墳が検出され、横穴式石室や周溝など古墳の全貌が確認された。富山県内で唯一現存する横穴式石室古墳である。

奈良・平安時代の遺跡では、鍛冶町遺跡（図 3・8）、富崎遺跡（図 3・10）、下呂東遺跡（図 3・15）、各願寺前遺跡などで集落が確認されている。富崎遺跡では、8～9 世紀の掘立柱建物が 2 棟検出されている。新町 II 遺跡では、平安時代前期の桁行 5 間 × 梁行 2 間の大型掘立柱建物などが検出され、一般集落から卓越した中核集落であり、村落首長の主導で形成された計画村落とされている。鍛冶町遺跡ではかまどのある竪穴建物や、「驚」の墨書きがある須恵器が出土している。

藤田富士夫氏は「和名類聚抄」に記載されている郡名の比定地として、本遺跡周辺を婦負郡菅原郷に想定されている。〔藤田 2002〕

中世の遺跡としては、翠尾 II・小倉中稻遺跡（図 3・16）で 12 世紀後半～13 世紀・14 世紀前半・15 世紀後半～16 世紀前半の 3 時期を中心とした集落が確認されている。14 世紀代の石組遺構は、内側に石の面を揃えた構造であり、墳墓・経塚などの宗教施設であると想定されている。

山田川両岸の丘陵上には、神保氏の根据地である富崎城（図 3・17）や支城群が山々に立地し、越中の東西を結ぶ要衝として、争奪戦が繰り返された。

本遺跡に関連する伝承として、『肯構泉達録』によれば、犬長年間（824～833）に天子の代官水谷藏人が館本郷村（現富山市八尾町館本郷）に派遣され居住していたとある。本遺跡や翠尾 I・南部 I 遺跡の八尾地域側で確認されている古代の遺構の時期と重なり、関連が推測される。



図1 工事計画図及び遺跡所在範囲図 (S=1/7500)

300m
(1/7500)



図2 試掘トレンチ位置図 (S=1/1500)



1. 鮎本郷II遺跡 2. 葦尾I・南部I遺跡 3. 田中館跡 4. 富崎赤坂・離山塚遺跡
 5. 千坊山遺跡 6. 六治古塚墳墓
 7. 向野塚墳墓 8. 鐵治町遺跡 9. 銀坂塚墳墓群 10. 富崎遺跡 11. 富崎塚墳群
 12. 勤使塚古墳 13. 王塚古墳
 14. 富崎千里古墳群 15. 下邑東遺跡 16. 葦尾II・小倉中稻遺跡 17. 富崎城跡

図3 周辺の遺跡分布図 (S=1/25000)

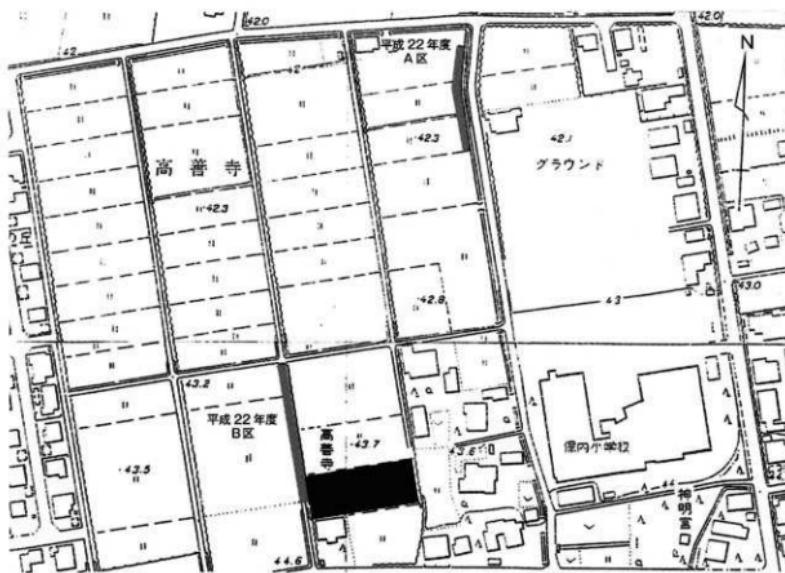


図4 調査区位置図 (S=1/2500)

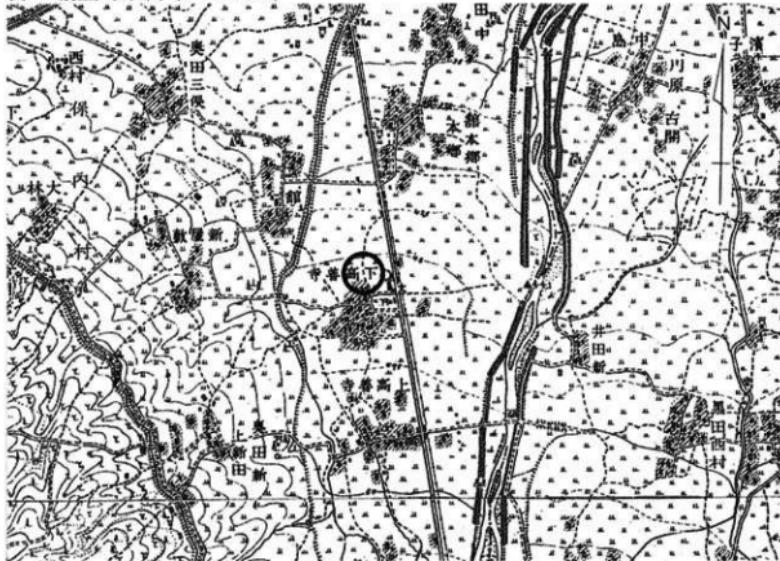


図5 陸地測量部の迅速図(明治43年発行)上の調査対象地位置図(S=1/25000)

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査区は、高善寺公民館北側の水田1枚を設定した(図2)。発掘調査面積は1198.7m²である。測量基準点は国土地標第VII系を使用した。

発掘調査は、最初に耕作土・造成盛土を試掘調査の結果をふまえながら遺物包含層上面までバックホウにより掘削・除去した。その後、遺物包含層上面から人力による掘削を行った。

遺物包含層掘削と合わせて、遺構検出を行った。調査区全体の遺構検出が完了してから、遺構掘削を行った。遺構は断面観察用の畔を残して掘削し、断面を写真と図面に記録した後完掘した。遺物が出土した遺構は、遺物出土状況写真と図面に記録した後、完掘した。遺物はトータルステーションを使用して、位置と高さを記録した。

図面は、平面図・断面図・遺物出土状況図とも縮尺20分の1・10分の1を基本として作成した。

カメラは現地調査では35mm・プローニー(6×7)サイズを使用し、フィルムはカラーリバーサルと白黒を使用した。遺物写真は4×5サイズを使用し、フィルムは白黒を使用した。

第2節 基本層序(図6)

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。

層序は、部分的に見られる擾乱などを除き、以下の5つの層に分けることができる。今回の調査ではIV層上面で遺構の検出を行った。

I層：表土・耕作土

II層：10YR5/6 黄褐色砂質土鉄分30%含(耕整土)

III層：10YR2/2 黑褐色粘土(遺物包含層・旧流路埋土)

IV層：10YR4/6 褐色シルト～砂質シルト、10YR2/3 黑褐色シルト斑状混(地山)

V層：礫層

III地形は、調査区東から西に向かって緩やかに傾斜しており、SD46より東側にあった遺構は、後世の削平を受けていると考えられる。

第3節 遺構

遺構は、調査区西側で集中して検出した。時期としては弥生時代終末～古墳時代初頭の土坑・ピット、奈良・平安時代の掘立柱建物2棟・土坑・ピット、中世～近世の溝、時期不明の土坑・ピットなどを確認した。

1 弥生時代～古墳時代

(1)土坑

SK63 調査区中央北より検出した。楕円形を呈する。長軸0.36m、短軸0.21m、深さ0.24m、断面はU字形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。炭化物等は混入しない。焼土や硬化面等は確認できなかった。

遺物は占墳土師器壺・高杯が出土した。古墳時代中期と考えられる。

SK100 調査区中央北端で検出した。調査区北端に切られている。楕円形を呈すると考えられる。長軸0.6m、短軸0.3m、深さ0.3m、断面は舟底形である。北側を調査区端に切られているため、遺構の全容は不明である。遺構埋土は2層に分けられ、自然堆積と考えられる。炭化物等は混入しない。焼土や硬化面等は確認できなかった。

遺物は弥生土器が遺構底面近くから出土した。遺物の時期から、月影～白江期と考えられる。

2 奈良・平安時代

(1) 捩立柱建物

S B 2 0 調査区の西南部で検出した。桁行3間×梁行4間2面庇の継柱建物である。身舎は桁行3間、梁行は2間で、東西に庇をもつ。建物の東南隅の柱穴が調査区外になるため、桁行が3間以上になる可能性もある。柱間寸法は、桁行が北から2.7m、2.9m、2.7m、梁行が西から2.6m、2.4m、2.4m、2.6mである。

建物の方位は南北棟でN・10°・Eである。S P 1とS P 4の梁間寸法が0.1m短く不規則であり、他の柱穴と比較してS P 1 9の深さが浅い。建物プランは複数の案が考えられるため、建物の構造や性格については、第V章総括で考察する。

S P 8がS P 1 0 5を切っている。他に重複する遺構はない。

個別の柱穴については以下のとおりである。

S P 1 円形を呈する。直径0.4m、深さ0.38m。断面は不整形である。遺構埋土は2層に分けられ、柱が無くなった後、自然堆積と考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 2 楕円形を呈する。長軸0.66m、短軸0.28m、深さ0.68m。断面は不整形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 3 円形を呈する。直径0.56m、深さ0.58m。断面はU字型である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 4 円形を呈する。直径0.39m、深さ0.32m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。埋土には握り拳大の礫が混入する。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 5 円形を呈する。直径0.41m、深さ0.36m。断面はU字型である。遺構埋土は2層に分けられ、自然に埋まったと考えられる。遺構底部に礫がある。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 6 円形を呈する。直径0.41m、深さ0.54m。断面はU字型である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物には古代土師器がある。

S P 7 円形を呈する。直径0.44m、深さ0.5m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物には古代土師器がある。

S P 8 楕円形を呈する。長軸0.71m、短軸0.43m、深さ0.6m。断面はH字形である。遺構埋土は単層で、一気に埋まったと考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物には土師器がある。S P 1 0 5より新しい。

S P 9 円形を呈する。直径0.4m、深さ0.32m。断面はU字型である。遺構埋土は2層に分けられ、中央に柱痕跡の堆積が斜めに見られる。柱が抜き取られている可能性がある。柱根や柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 1 0 楕円形を呈する。長軸0.35m、短軸0.28m、深さ0.38m。断面は台形である。遺構埋土は2層に分けられ、断面観察から、柱が失われた直後に一度埋まり、その後時期差をおいて埋まつたと考えられる。柱痕跡等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 1 1 円形を呈する。直径 0.35 m、深さ 0.46 m。断面は方形である。遺構埋土は 2 層で、中央に柱痕跡の堆積が見られる。柱根や柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 1 2 円形を呈する。直径 0.44 m、深さ 0.44 m。断面は U 字型である。遺構埋土は 2 層に分けられ、中央に柱痕跡と考えられる堆積が見られる。柱根や柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 1 3 円形を呈する。直径 0.4 m、深さ 0.44 m。断面は U 字型である。遺構埋土は 3 層に分けられ、中央に柱痕跡と考えられる堆積が見られる。遺構底部には掘り挙人の跡が見られる。柱根や柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物は須恵器・土師器がある。

S P 1 4 円形を呈する。直径 0.33 m、深さ 0.4 m。断面は J 字形である。遺構埋土は 3 層に分けられ、柱痕跡と考えられる土が斜めに堆積しており、柱が抜き取られている可能性がある。柱根、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 1 5 円形を呈する。直径 0.47 m、深さ 0.44 m。断面は U 字形である。遺構埋土は 3 層に分けられ、中央に柱痕跡と考えられる堆積が見られる。柱痕跡がほぼまっすぐで、柱は抜き取られず自然に腐食して失われたと考えられる。柱根や柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 1 6 円形を呈する。直径 0.48 m、深さ 0.4 m。断面は U 字型である。遺構埋土は 4 层に分けられ、柱穴の西寄りに柱痕跡と考えられる堆積が見られる。柱痕跡がほぼまっすぐであり、柱は抜き取りではなく自然に腐食して失われたと考えられる。柱根や柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 1 7 円形を呈する。直径 0.48 m、深さ 0.44 m。断面は J 字形である。遺構埋土は 2 層に分けられ、中央に柱痕跡と考えられる堆積が見られる。柱根や柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物には鉄滓がある。

S P 1 8 円形を呈する。直径 0.33 m、深さ 0.32 m。断面は U 字型である。遺構埋土は 2 層に分けられ、中央に柱痕跡と考えられる堆積が見られる。柱根や柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物には須恵器・土師器がある。

S P 1 9 円形を呈する。直径 0.32 m、深さ 0.12 m。断面は不整形である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。他の柱穴と比較すると浅い。出土遺物はなかった。

S B 1 0 4 調査区の中央西より検出された。1 間 × 1 間の掘立柱建物である。柱間寸法は、S P 8 4 - S P 8 8 間が 225 m、S P 8 8 - S P 8 7 間が 26 m、S P 8 7 - S P 8 9 間が 23 m、S P 8 9 - S P 8 4 間が 26 m である。建物の方位は南北棟で N - 25° - W である。S P 8 5 - S P 8 6 - S P 9 0 - S P 9 1 - S P 9 2 - S P 9 3 - S P 9 4 - S P 9 5 と重複する。出土遺物が無いため時期の特定は困難であるが、重複する遺構から弥生土器が出土しており、遺構の立地や埋土の状況、検出した層位等を考慮すると、S B 2 0 と同じ時期か、より古い時期であると考えられる。

個別の柱穴については以下のとおりである。

S P 8 4 円形を呈する。直径 0.38 m、深さ 0.22 m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 8 7 円形を呈する。直径 0.4 m、深さ 0.34 m。断面は U 字形である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 8 8 円形を呈する。直径 0.32 m、深さ 0.34 m。断面は U 字形である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

S P 8 9 円形を呈する。直径 0.4 m、深さ 0.18 m。断面は台形である。遺構埋土は単層で、自然堆

積と考えられる。柱根や柱痕跡、柱の当たり等は確認できなかった。出土遺物はなかった。

(2) 土坑

S K 6 7 北端を切られているが、楕円形を呈すると考えられる。長軸 0.8 m、短軸 0.66 m、深さ 0.18 m。断面は舟底形である。遺構埋土は 2 層で、一気に堆積したと考えられる。埋土には炭化物等は見当たらない。貼床や硬化面等は確認できなかった。

遺物は須恵器・土師器が上層から出土した。遺物の時期から、10 世紀代と考えられる。

(3) ピット

S P 1 0 5 S P 8 に切られているため全容は不明であるが、凸形を呈すると考えられる。直径 0.48 m、深さ 0.32 m。断面は U 字型である。遺構埋土は 2 層に分けられ、柱痕跡と考えられる堆積が見られる。S P 8 の前に掘られた柱穴の可能性がある。出土遺物はなかった。

3 中世以降

(1) 溝

S D 4 6 調査区東部で検出した。南から北へほぼ直線に流れる。検出長 21.65 m、幅 1.5 m、深さは最も深い部分で 0.62 m である。平面形は北が狭く南が広くなる。断面は舟底形を呈する。調査区北・南端で切られる。遺構埋土は 2 層に分けられる。溝が構築されて一度埋まり、その後、ほぼ同じ規模で掘り直されている。遺物は上層から、須恵器・中世土師器・越中瀬戸が出土している。遺物の出土する高さは一定ではない。下層から遺物が出土していないため、遺構が構築され始めた時期の判断は困難である。上層に様々な時期の遺物が出土しているため、中世～近世の長い期間溝として機能していた可能性がある。

(2) 土坑

S K 9 7 円形を呈する。直径 0.43 m、深さ 0.12 m。断面は舟底形である。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。焼土や硬化面などは確認できない。遺物は越中瀬戸・弥生土器が出土した。

遺構番号	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	断面形態	出土遺物	備考
SP1	円形	0.4	0.4	0.38	不整形		掘立柱建物 S B20
SP2	楕円形	0.66	0.28	0.68	不整形		掘立柱建物 S B20
SP3	円形	0.56	0.45	0.58	U字形		掘立柱建物 S B20
SP4	円形	0.39	0.34	0.32	台形		掘立柱建物 S B20
SP5	円形	0.4	0.31	0.36	U字形		掘立柱建物 S B20
SP6	円形	0.41	0.37	0.54	U字形	土師器	掘立柱建物 S B20
SP7	円形	0.44	0.42	0.5	台形	土師器	掘立柱建物 S B20
SP8	楕円形	0.71	0.43	0.6	U字形	土師器	掘立柱建物 S B20 S P 10 5 と切合関係。
SP9	円形	0.4	0.38	0.32	U字形		掘立柱建物 S B20
SP10	楕円形	0.35	0.28	0.38	台形		掘立柱建物 S B20
SP11	円形	0.35	0.34	0.46	方形		掘立柱建物 S B20
SP12	円形	0.44	0.4	0.44	U字形		掘立柱建物 S B20
SP13	円形	0.4	0.4	0.44	U字形	須恵器・土師器	掘立柱建物 S B20
SP14	円形	0.33	0.31	0.4	U字形		掘立柱建物 S B20
SP15	円形	0.47	0.44	0.44	U字形		掘立柱建物 S B20
SP16	円形	0.48	0.42	0.4	U字形		掘立柱建物 S B20
SP17	円形	0.48	0.42	0.44	U字形	鐵滓	掘立柱建物 S B20
SP18	円形	0.33	0.32	0.32	U字形	須恵器・土師器	掘立柱建物 S B20
SP19	円形	0.32	0.31	0.12	不整形		掘立柱建物 S B20

表 1 遺構一覧表 (1)

遺構 番号	平面 形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	断面 形態	出土遺物	備考
SK23	円形	0.76	0.52	0.16	船底形		
SK24	楕円形	1.02	0.66	0.2	不整形		
SP26	円形	0.32	0.28	0.22	U字形		
SP27	円形	0.38	0.3	0.3	U字形		
SK29	円形	2.5	2.4	0.48	不整形		
SK30	楕円形	0.7	0.5	0.13	舟底形		
SP31	円形	0.4	0.34				
SK34	楕円形	0.62	0.38	0.1	舟底形		
SK42	楕円形	0.9	0.4	0.12	舟底形	弥生土器	
SK45	楕円形	0.7	0.3	0.12	舟底形	弥生土器・中世土師器	
SD46	直線 (検出長)	21.65 (幅)	1.5	0.62	舟底形	須恵器・中世土師器・越中 瀬戸	調査区北端と南端に切られる。
SP52	円形	0.3	0.29	0.14	舟底形		
SP54	円形	0.3	0.26				
SP55	円形	0.43	0.34	0.16	舟底形		
SP56	楕円形	0.38	0.29	0.2	U字形		
SP57	楕円形	0.48	0.32	0.14	舟底形		
SP60	円形	0.44	0.36	0.14	舟底形	須恵器	
SP62	楕円形	0.54	0.4	0.14	舟底形		
SK63	楕円形	0.36	0.24	0.24	U字形	古墳土師器	
SP64	円形	0.36	0.34	0.1	舟底形	須恵器	
SP66	円形	0.34	0.31	0.14	舟底形		
SK67	楕円形?	0.8	0.66	0.18	舟底形	須恵器・土師器	
SK68	円形	0.7	0.52	0.48	舟底形		
SP69	楕円形	0.36	0.28	0.32	U字形		
SP70	円形	0.32	0.3	0.45	U字形		
SP72	円形	0.4	0.32	0.16	舟底形		
SP73	楕円形	0.54	0.35	0.12	舟底形		
SP74	円形	0.3	0.28	0.47	U字形		
SP75	円形	0.26	0.24	0.28	U字形		
SP76	円形	0.34	0.25	0.2	台形		
SP77	楕円形	0.6	0.36	0.2	不整形		
SP79	楕円形	0.5	0.44	0.14	舟底型		
SP80	円形	0.3	0.24	0.55	U字形		
SP82	円形	0.56	0.44	0.22	舟底形		
SK83	楕円形	0.7	0.48	0.27	不整形		
SP84	円形	0.38	0.3	0.22	台形	据立柱建物SB104	
SP85	円形	0.24	0.22	0.26	U字形		
SP86	円形	0.3	0.28	0.16	舟底形		
SP87	円形	0.4	0.36	0.34	U字形	据立柱建物SB104	
SP88	円形	0.32	0.32	0.34	U字形	据立柱建物SB104	
SP89	円形	0.4	0.4	0.18	台形	据立柱建物SB104	
SP90	円形	0.38	0.46	0.42	U字形	弥生土器	
SP91	円形	0.5	0.44	0.2	不整形		
SP92	円形	0.3	0.3	0.42	U字形		
SP93	円形	0.32	0.28	0.1	不整形		
SP94	円形	0.36	0.3	0.2	台形		
SP95	円形	0.27	0.26	0.24	U字形		
SP96	円形	0.26	0.22	0.32	U字形		
SK97	円形	0.43	0.4	0.12	舟底形	越中瀬戸・弥生土器	
SP98	円形	0.24	0.24	0.26	U字形		
SP99	円形	0.38	0.44	0.12	舟底形		
SK100	楕円形? (検出長)	0.6 (幅)	0.3 (幅)	0.3	舟底形	弥生土器	調査区北端に切られる。
SP101	楕円形	0.34	0.22	0.1	舟底形		
SP102	円形	0.24	0.2	0.08	台形		
SP103	楕円形	0.4	0.2	0.16	U字形		
SP105	円形?	0.48	0.44	0.32	U字形		SP8と切合関係。

表2 遺構一覧表(2)

第4節 遺物

遺物は、遺構及び包含層から弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、白磁、中世土師器、近世陶磁器などが収納コンテナ（長さ60cm×幅40cm×深さ10cm）に換算して19箱出土した。

遺物は、Ⅲ層の遺物包含層（黒色土）と、遺構検出面である地山直上からの出土が多くを占める。

遺構出土遺物は細かい破片が多く、実測、掲載できるものは少なかった。

1 弥生時代～古墳時代中期

S K 63 1は古墳土師器の「く」の字口縁壺である。頸部は強く屈曲し、外傾しながら外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く收める。面取は見られない。調整は、胴部外面は縦方向のハケ、頸部から口縁部は横方向のナデ、内面は横方向のハケ後横方向のナデを施す。内・外面とも煤・炭化物は付着しない。赤彩は確認できない。

2は古墳土師器の高杯坏部である。坏底部から口縁に向かって内湾しながら立ち上がり、矧く外反する口縁端部が付く。口縁端部は丸く收める。口縁端部内面に段がある。脚部は残存していないが、脚部途中まで緩やかに広がり、裾部は外反すると推測される。内・外面ともミガキ調整が施されると考えられるが、磨滅が激しく単位等は確認できない。赤彩は確認できない。煤・炭化物は付着しない。漆町編年の13群土器併行と考える。

包含層その他 28・29・84～89は弥生土器である。28は壺か壺の口縁か、高杯坏部あるいは器台受部の口縁部である。外傾しながら外反する口縁部で、口縁端部はわずかに内側に巻き込み、内面に段がある。口縁端部内・外面に赤彩を施す。調整は内面に横方向のハケ後ミガキ、外面に右斜め方向ハケ後ミガキを施すが単位は確認できない。内・外面とも煤・炭化物は付着しない。

29は有段口縁壺である。外反する頸部に短い口縁部が付く。口縁端部はやや外反しながら丸く收める。口縁部内面は強く屈曲する。擬円線は確認できない。調整は、内・外面とも横方向のナデを施す。口縁端部内面に被熱を受ける。煤・炭化物は付着しない。

84は「く」の字状口縁壺である。頸部は強く屈曲し、外傾しながら外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く收める。面取は見られない。調整は、外面は縦方向のハケ後ナデ、内面は斜め方向のハケと横方向のナデを施す。内・外面とも煤・炭化物は付着しない。赤彩は確認できない。

85は「く」の字状口縁壺である。頸部の屈曲は弱く、外傾しながらわざかに外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く收める。面取は見られない。調整は、外面は縦方向のミガキ、内面は斜め方向のハケと横方向のナデを施す。内面に煤が付着する。赤彩は確認できない。

86は「く」の字状口縁壺である。頸部は緩く屈曲し、外傾しながら外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く收める。面取は見られない。調整は、磨滅が激しく内・外面とも不明である。内・外面とも煤・炭化物は付着しない。赤彩は確認できない。

87は「く」の字状口縁壺である。頸部の屈曲は弱く、外傾しながら外反して伸びる口縁部が付く。口縁端部は丸く收める。面取は見られない。調整は、外面は斜め方向のハケ後、口縁部に横方向のナデ、内面は横方向のハケを施す。内・外面とも煤・炭化物は付着しない。赤彩は確認できない。

88は「く」の字状口縁壺である。頸部の屈曲は不明である。外傾する口縁部が付く。口縁端部外面を面取りし、断面は三角形に近い形態を呈する。口縁端部は丸く收める。調整は、内・外面とも不明である。内・外面とも煤・炭化物は付着しない。赤彩は確認できない。

89は蓋のツマミ部である。直径5cmで大形の蓋に付くと推測される。ツマミ頂部は平坦で、全体にヘラによるミガキ調整が施されるが単位は確認できない。内・外面とも赤彩されている。煤・炭化物は付着しない。

2 古墳時代後期～奈良・平安時代

SP 13 3は須恵器坏の口縁部である。体部から外傾しながら立ち上がり、口縁端部はやや外反しながら先端がすぼまる。焼成良好、胎土は精良である。

SP 18 4は須恵器坏である。体部は外傾してほぼまっすぐに立ちあがり、口縁端部はほぼまっすぐに丸くおさめる。焼成良好、胎土は精良である。内面と外面体部はロクロナデ、底部外面には回転ヘラ切りの痕跡が残る。ロクロ回転方向は、反時計回りである。

SP 60 5は須恵器坏の口縁部である。体部から外傾しながら立ち上がり、口縁端部はやや外反しながら先端がすぼまる。焼成良好、胎土は精良である。

SK 67 6は須恵器坏の口縁部である。体部は外傾して内湾しながら口縁端部はほぼまっすぐに丸くおさめる。焼成はやや不良、胎土は精良である。

SD 46 7～17は須恵器である。7・8は口縁内面にかえりをもつ坏蓋である。内・外面ともロクロナデ、胎土は精良である。焼成は7がやや不良、8は良好である。時期は7世紀後半。9・10は坏蓋である。9は口縁端部を短く内面に屈曲させる。焼成良好、胎土は精良である。10は扁平な天井部でから直線的に体部が伸び、口縁部は内面に短く屈曲させる。焼成良好、胎土は精良である。11・12は坏の口縁部である。11はほぼまっすぐに外傾する体部～口縁部である。口縁端部丸く收める。焼成良好、胎土精良である。12は外傾する体部口縁部はわずかに外反する。端部は丸く收める。焼成やや不良、胎土精良である。13は壺か壺の口縁部である。短い頸部が弱く屈曲し、口縁端部外面を面取し、肥厚する。焼成良好、胎土精良である。14・15は壺か皿の口縁部である。焼成良好、胎土精良である。16は壺か壺の底部である。焼成時の気泡が見られる。焼成良好、胎土精良である。17は坏B底部である。底端部に外方へ踏ん張る高台を貼り付ける。外面に回転ヘラ切りの痕跡が残る。ロクロ回転方向は反時計回りである。焼成やや不良、胎土精良である。

包含層その他 30～33は土師器である。30・31は壺口縁部、32・33は内黒碗の口縁部で、内面にミガキを施す。34～81、90・93～105は須恵器である。34～42は坏蓋である。34は7世紀後半、35～42はおおむね8世紀後半～10世紀前半。44～60・71～74は坏か碗の口縁部、61～70・75～79は坏か碗、皿の底部である。80・81は壺か壺の胴部である。80は外面タタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。90は古墳時代後期の坏蓋である。この地域で当該期の遺物の出土は初である。93・94は坏蓋である。91・92は棒状尖底製塙土器の口縁部である。内・外面とも被熱している。7世紀末か、95は壺か壺の口縁部である。短い頸部が弱く屈曲し、口縁端部外面を面取し、肥厚する。焼成良好、胎土精良である。96・97は坏か碗の口縁部である。98～100は坏B底部である。101～103は坏Aか碗の底部である。104は大壺の頸部～口縁部である。櫛描波状文を2条施す。105は壺の胴部である。なお、本遺跡では墨書等の文字資料は確認していない。

3 中世～近世

SD 46 18～24は中世土師器皿である。碎片が多いため判別が難しいが、18・19・22はロクロ成形、20・21・23・24は非ロクロ成形である。

25は珠洲の擂鉢、26は越中瀬戸皿の底部である。削出高台で、暗赤褐色の胎土に灰釉を施す。

SK 97 27は越中瀬戸鉢である。磨滅しているが内・外面に鉄釉を施す。

包含層その他 82は白磁碗である。体部がやや内湾しながらほぼ直線的に開く。口縁部に大きめの玉緑を有する。胎土は硬質で灰白色を呈する。大宰府分類の「IV型」である。時期は11世紀後半～12世紀前半。106は中世土師器皿、107は珠洲擂鉢である。内面にオロシ目が残る。83は肥前系の陶胎染付碗、108は越中瀬戸向付である。緑色の釉を厚く施す。

番号	出土地点	形態			土質	塊成	色調		成形・調整		備考	
		基盤	口径 (cm)	高さ (cm)			砂粒	内面	外面	内面		
1	SK63 吉墳土師器 底	22.0	6.8	—	やや粗 ・高环	1~2m m砂多し	良	7.5YR7/6 暗	7.5YR7/6 暗	ハケ後ナデ	ハテ・ナデ	
2	SK63 吉墳土師器 ・高环	13.8	6.3	—	やや粗 ・粗	1~2m m	良	10YR8/3 浅黄褐	10YR8/3 浅黄褐	ミガキ?	ミガキ?	
3	SP13 瀬沿器・坏	12.6	2.6	—	粘質	1mm	良	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
4	SP18 瀬沿器・坏A	11.8	3.5	5.0	稍良	1~2m m	良	5Y6/2 灰オリーブ	5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ 高都ヘラクズリ	
5	SP60 瀬沿器・坏	12.2	2.0	—	稍良	1mm	良	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	SK67 瀬沿器・坏	12.0	3.0	—	粘質	1mm	やや不規	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
7	SD46 須恵器・坏茎	11.6	1.0	—	稍良	—	やや不規	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
8	SD46 須恵器・坏茎 No.35	14.4	1.1	—	稍良	—	良	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	SD46 須恵器・坏茎 No.9	12.4	1.9	—	稍良	—	良	2.5YR6/1 赤灰	2.5YR6/1 赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
10	SD46 須恵器・坏茎 No.54	12.4	0.8	—	稍良	—	良	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
11	SD46 瀬沿器・坏	8.4	2.3	—	粘質	—	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	SD46 瀬沿器・坏	11.2	2.0	—	稍良	—	やや不規	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
13	SD46 須匠器・要か壺	13.4	2.3	—	稍良	—	良	10YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
14	SD46 須匠器・要か壺 東側	12.6	2.0	—	稍良	—	良	2.5Y6/1 灰灰	2.5Y6/1 灰灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
15	SD46 須匠器・要か壺 No.41	14.8	1.2	—	稍良	—	良	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
16	SD46 須匠器・要か壺 No.70	—	2	4.4	稍良	—	良	2.5Y6/1 灰灰	2.5Y6/1 灰灰	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラ切 反時計回り	
17	SD46 須匠器・坏B No.24	—	2.2	9.8	稍良	1mm	良~ 不規	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白 高台2.5Y8/3 淡黄	ロクロナデ	ヘラクズリ 點付萬合	
18	SD46 南側	中世土師器・三	5.4	1.3	—	密	1mm	良	10YR7/4 に少し黒斑 +10YR3/2 黑斑	10YR7/4 に少し黒斑 +10YR3/2 黑斑	ロクロナデ	ロクロナデ
19	SD46 No.58	中世土師器・三	11.8	1.3	—	密	—	良	7.5YR7/4 に少し黒	7.5YR7/4 に少し黒	ロクロナデ	ロクロナデ
20	SD46 中世土師器・ No.53	灯明器	13.9	2.5	—	密	—	良	7.5YR7/4 に少し黒	7.5YR7/4 に少し黒	手づくね	手づくね 蝶付着
21	SD46 南側	中世土師器・三	5.4	0.8	—	密	—	良	10YR5/2 灰黃褐	10YR5/3 に少し黃褐	手づくね	手づくね
22	SD46 No.67	中世土師器打明器	7.4	1.8	—	密	—	良	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ 口縁にタール村著
23	SD46 南側	中世土師器・三	8.0	0.8	—	密	—	良	10YR7/3 に少し黒	2.5Y6/6 明黄褐	手づくね	手づくね
24	SD46 No.57	中世土師器・三	9.0	1.5	—	密	—	良	2.5YR7/6 褐	10YH2/2 黑褐	手づくね	手づくね
25	SD46 溝跡・埴林	30.6	5.2	—	稍良	1~2mm	良	N6/ 灰	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
26	SD46 越中瀬戸・並	—	1.6	4.3	稍良	1~2m m	良	10YR7/4 に少し黒	2.5Y7/3 淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ 脚土2.5YR3/6 暗赤褐 削出萬合	
27	SK97	越中瀬戸・並	7.8	7.2	—	稍良	1~2m m	良	7.5YR4/2 淡黄	7.5YR4/2 淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ
28	地山廻上	別生土器・要か壺	21.8	4.0	—	密	1~2mm	良	10YR8/4 淡黄褐	10YR8/4 淡黄褐	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ 口縁部表透
29	地山廻上	別生土器・要	12.2	2.5	—	密	0.5mm	良	2.5YR4.2 灰	10H4/6 灰	ナデ	ナデ
30	地山廻上	土師器・要	17.4	2.4	—	密	—	良	10YR8/3 淡黄褐	10YR8/3 淡黄褐	ナデ	ナデ
31	地山廻上	土師器・要	17.4	2.7	—	密	1mm	良	5YR9/3 淡黄	5YR9/2 灰白	ナデ	ナデ
32	地山廻上	土師器・内裏壺	14	4.2	—	粗	1~2m m	良	2.5Y2/1 灰	10YR7/4 に少し黒	ミガキ	ハケメ
33	包含層	土師器・内裏壺	12.2	3.0	—	密	—	良	10YR2/1 灰	10YR2/2 灰白	ミガキ	ナデ
34	包含層	瀬沿器・坏茎	7.1	2.2	—	粗	1mm	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ナデ
35	包含層	瀬沿器・坏茎	14.0	2.1	—	稍良	—	良	10YR6/1 褐灰	10YR7/1 灰白	ナデ・ケズリ	ナデ
36	埴山上	瀬沿器・坏茎	17.6	2.7	—	稍良	2mm	良	5Y6/1 一部5P9R6/1 青灰	5P9R6/2 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ 脚部口クロ底影の後 ツマミ粘付
37	埴山上	瀬沿器・坏茎	9.2	1.1	—	稍良	1mm	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ナデ・ケズリ	ナデ
38	埴山上	須恵器・坏茎	15.8	1.2	—	稍良	—	良	2.5Y6/1 灰灰	2.5Y6/1 灰灰	ナデ	ナデ
39	包含層	瀬沿器・坏茎	18.8	1.9	—	稍良	1mm	良	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	ナデ・施部内面 ハラケズリナ デ	

表3 遺物観察表(1)

番号	出土地点	形態			胎土	焼成	色調		成形・焼成		備考	
		西暦	口径 (cm)	器高 (cm)			質	砂粒	内面	外面		
40	包合層	須恵器・环蓋	11.1	2.0	—	精良	良	良	N6/ 灰	N6/ 灰	クロナデ・ケズリ	クロナデ
41	包合層	須恵器・环蓋	10	0.7	—	精良	1 mm	良	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ナデ	ナデ
42	地山直上	須恵器・环蓋	15.2	1.5	—	精良	2mm	良	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ナデ・ケズリ	ケズリ・ナデ
43	地山直上	須恵器・环 A	9.4	3.7	5.0	精良	1mm	不良	N7 灰白 及び 5Y6/2 灰白	N7 灰白 及び 5Y6/3 灰白	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラ切 時計回り
44	地山直上	須恵器・环少留	10.3	2.8	—	精良	1mm	良	N7/ 灰白	N6/ 灰	クロナデ	クロナデ
45	地山直上	須恵器・环少留	11.5	3.1	—	精良	—	良	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	クロナデ	クロナデ
46	地山直上	須恵器・环少留	11.2	2.3	—	精良	1mm	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ナデ	ナデ
47	地山直上	須恵器・环少留	10.9	3.2	—	精良	1mm	良	2.5Y7/1 灰白	5Y5/1 灰白	ナデ	ナデ
48	地山直上	須恵器・环少留	13.8	3.1	—	精良	—	良	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	ナデ	ナデ
49	地山直上	須恵器・环少留	10.8	2.5	—	精良	—	良	N7/ 灰白	N6/ 灰	ナデ	ナデ
50	地山直上	須恵器・环少留	13.2	2.5	—	精良	1mm	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰	ナデ	ナデ
51	地山直上	須恵器・环少留	15.9	2.8	—	精良	—	良	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 (一部 10YR5/1 褐灰)	ナデ	ナデ
52	地山直上	須恵器・环少留	10.4	1.6	—	精良	0.5mm	良	N6/ 灰	N7/ 灰白	ナデ	ナデ
53	地山直上	須恵器・环少留	11.8	2.2	—	精良	—	良	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ナデ	ナデ
54	地山直上	須恵器・环少留	16.0	1.8	—	精良	0.5mm	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰	ナデ	ナデ
55	地山直上	須恵器・环少留	9	2.2	—	精良	—	不良	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	クロナデ	クロナデ
56	地山直上	須恵器・环少留	11.0	2.9	—	精良	—	良	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	クロナデ	クロナデ
57	地山直上	須恵器・环少留	14.7	1.5	—	精良	—	良	7.5YR5/1 褐灰	7.5YR5/1 褐灰	ナデ	ナデ
58	地山直上	須恵器・环少留	10	2.2	—	精良	—	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ナデ	ナデ
59	地山直上	須恵器・环少留	13.8	1.7	—	精良	—	良	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	ナデ	ナデ
60	地山直上	須恵器・环少留	17.5	2.7	—	精良	0.5mm	良	2.5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ナデ	ナデ
61	地山直上	須恵器・环 B	—	1.5	12.0	精良	—	良	SPB6/1 青灰	SPB6/1 青灰	クロナデ	附付高台
62	地山直上	須恵器・环少留	—	1.6	—	精良	—	良	5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラ切 時計回り
63	地山直上	須恵器・环少留	—	1.4	6.0	精良	1 mm	良	SY6/1 灰	SY6/1 灰	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラ切
64	地山直上	須恵器・环少留	—	1.3	4.5	精良	—	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラ切
65	地山直上	須恵器・环少留	—	1.1	4.8	精良	—	良	N7/ 灰白	N6/ 灰	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラ切
66	地山直上	須恵器・环少留	—	1	6.5	精良	—	良	N7/ 灰白	N7/ 灰白	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラ切
67	地山直上	須恵器・环少留	—	0.9	5.8	精良	1~2 mm	良	N7/ 灰白	N7/ 灰白	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラ切
68	地山直上	須恵器・环少留	—	1.4	8.2	精良	1~2 mm	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラ切
69	包合層	須恵器・环少留	—	1.8	7.7	精良	—	良	5Y6/1 青灰~ 5Y4/1 墓青灰	5Y6/1 青灰~ 5Y4/1 墓青灰	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラ切
70	地山直上	須恵器・环少留	—	2.0	5.3	精良	0.5 mm	良	N7/ 灰白	5GY7/1 明オリーブ灰	クロナデ	クロナデ 底部鉢輪へラズリ
71	包合層	須恵器・环少留	—	13.5	3.5	精良	1mm	良	N6/ 灰	N6/ 灰	クロナデ	クロナデ
72	包合層	須恵器・环少留	—	12.4	2.5	精良	0.5mm	良	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	ナデ	ナデ
73	包合層	須恵器・环少留	—	16.6	2.5	精良	1~2 m	良	5Y7/1 灰白	10YR7/1 灰白	ナデ	ナデ

表4 遺物観察表(2)

番号	出土地点	形態				土質	焼成	色調		成形・調整		備考	
		器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)			内面	外面	内面	外面		
74	菅原層	須恵器・环状壺	9.6	1.2	—	精良	良	7.5YR8/1 灰白	10YR7/1 灰白	ナデ	ナデ		
75	包含層	須恵器・环状壺	—	1.6	10.4	精良	良	5PB7/1 青灰	5PB6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラ切	貼付高台	
76	包含層	須恵器・环状壺	—	2.2	7.6	精良	良	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラ切		
77	包含層	須恵器・环状壺	—	1.7	5.6	精良	良	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラ切		
78	包含層	須恵器・环状壺	—	1	5.6	精良	良	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
79	包含層	須恵器・环状壺	—	1.9	5.4	精良	良	N6/ 灰	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラ切		
80	包含層	須恵器・环状壺	—	4.7	—	精良	良	2.5Y8/2 灰白	10Y7/1 灰白	体部上部ナデ 下部同心円当て台 カキメ	平行タキナメ		
81	包含層	須恵器・环状壺	—	4.2	—	精良	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	当て具	平行タキナメ カキメ		
82	包含層	白磁・碗	17.6	3.0	—	精良	良	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土 7.5 Y 8/1 灰白	
83	埴生層	肥料・陶製排水管	—	3.3	—	精良	良	10GG1/ 綠	10GG1/ 綠	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土 N 8/1 灰白高台	
84	排水溝	弥生土器・壺	11.7	2.4	—	密	1 ~ 2mm	良	5YR8/2 灰白	2.5YR7/3 淡赤	ハケ後ナデ	ハケ・ナデ	
85	排水溝	弥生土器・壺	19.5	3.3	—	密	1 mm	良	7.5Y5/2 オリーブ黒	2.5Y5/2 暗赤	ハケ・ナデ	ミガキ	
86	排水溝	弥生土器・壺	19.5	4.2	—	密	1 mm	良	2.5YR6/6 緑	5YR6/6 緑	調整不明	調整不明	
87	埴土	弥生土器・壺	19.7	4.6	—	密	1 ~ 2 m m	良	7.5YR7/6 緑	7.5YR7/6 緑	ハケ	ハケ後ナデ	
88	レキ層	弥生土器・壺	20.8	2.5	—	密	—	良	10YR7/3 に少い黄斑	10YR7/3 に少い黄斑	調整不明	調整不明	
89	排水溝	弥生土器・壺	5.0	4.6	—	密	1 mm	良	2.5YR6/8 緑	2.5YR8/4 淡黄緑	ミガキ	ミガキ	蓋つまみ部分赤
90	埴土	須恵器・环	10.2	3.2	—	精良	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ 底部錐止ヘラ切		
91	排水溝	製陶炉	11.8	3.6	—	やや粗	1 mm	良	7.5YR7/6 に少い橙	5YR6/6 緑	ナチ	粘土結晶上・ナ デ	
92	排水溝	製陶炉	12.6	3.6	—	やや粗	1 mm	良	2.5YRA/8 赤・褐	5YR7/4 に少い橙	ナチ	ナデ	
93	埴土	須恵器・环	13.6	1.3	—	精良	0.5 ~ 1 mm	良	5Y7/1 灰白	5Y7/2 灰白	ナチ	ナデ	
94	埴土	須恵器・环	—	1.2	—	精良	1 mm	良	N7/ 灰白	N7/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
95	表土	須恵器・环	12.0	2.7	—	精良	1 mm	良	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	ナチ	ヘラケズリ・ナ デ	
96	埴土	須恵器・环	14.7	3.7	—	精良	—	良	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	ナチ	ナデ	
97	埴土	須恵器・环	17.2	2.1	—	精良	1 mm	良	2.5Y6/1 黄黒	2.5Y6/1 黄黒	ナチ	ナデ	
98	埴土	須恵器・环B	—	2.0	6.0	精良	—	良	N7/ 灰白	N7/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台
99	排水溝	須恵器・环B	—	4.3	8.8	粗緻	1 mm	良	側面 7.5V5/1 底部 N7 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘチ多	貼付高台 ロクロ回転方向 反時計回り
100	レキ層	須恵器・环B	—	3.7	8.2	精良	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	貼付高台	
101	表土	須恵器・环	—	2.7	8.6	精良	良	N5/ 灰	N5/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
102	埴土	須恵器・环	—	1.2	5.4	精良	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転ヘラ切		
103	レキ層	須恵器・环	—	0.9	9	精良	良	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 黄黒	ロクロナデ	ロクロナデ 底部錐止ヘラ切		
104	埴土	須恵器・壺	—	5.2	—	精良	1 mm	良	N5/ 灰	N5/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	彫刻波状文 2段
105	排水溝	須恵器・盤底壺	—	5	—	精良	1 ~ 2 m m	良	N6/ 灰	N6/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面算付壠
106	表土削削	中世土器・壺	7.6	1.6	2.5	密	0.5 ~ 1 mm	良	5YR8/1 灰白	5YR8/2 灰白	手づくね	手づくね	
107	表土	珠洲・抹拂	26.2	3.5	—	精良	1 ~ 2 m m	良	N4/ 灰	N4/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
108	レキ層	越中越戸・向外	10	3	—	精良	—	良	5Y7/3 淡黄	5Y7/3 淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土 2.5Y7/2 灰黄

表5 遺物観察表(3)

第IV章 自然科学分析

(株) 加速器分析研究所

1 分析の目的

掘立柱建物 S B 2 0 の柱穴から出土した炭化物について、AMS 法による放射性炭素年代測定を行い、遺物が出土せず時期決定の困難な遺構の時期判断する一助とする。

2 測定対象試料

館本郷 II 遺跡は、富山県富山市八尾町高善寺（北緯 36° 36' 38.4"、東経 137° 8' 9.2"）に所在する。測定対象試料は、S P 2 挖方出土炭化物（1 : IAAA-112322）、SP11 挖方出土炭化物（2 : IAAA-112323）、S P 1 7 柱痕跡出土炭化物（3 : IAAA-112324）の合計 3 点である（表1）。

3 化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 M に達した時には「AAA」、1 M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

（6）グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

（1） $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である（表1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2） ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として選る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 行を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% あることを意味する。

（3）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、次年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応す

る較正曲線上の曆年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下桁を九めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。曆年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。曆年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

炭化物の ^{14}C 年代は、SP2 挖方出土の1が 900 ± 30 yrBP、SP11 挖方出土の2が 850 ± 20 yrBP、SP17 柱痕跡出土の3が 910 ± 30 yrBPである。曆年較正年代 (1σ) は、1が $1048 \sim 1182$ cal ADの間に3つの範囲、2が $1170 \sim 1220$ cal ADの範囲、3が $1045 \sim 1169$ cal ADの間に3つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-112322	1	SP2 挖方	炭化物	AAA	-22.70 ± 0.55	900 ± 30	89.42 ± 0.29
IAAA-112323	2	SP11 挖方	炭化物	AAA	-18.87 ± 0.63	850 ± 20	90.00 ± 0.27
IAAA-112324	3	SP17 柱痕跡	炭化物	ΔΔΔ	-29.38 ± 0.68	910 ± 30	89.33 ± 0.29

表6

[#4842]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112322	860 ± 20	89.84 ± 0.27	898 ± 25	1048calAD - 1087calAD (32%)	
				1122calAD - 1138calAD (112%)	1041calAD - 1108calAD (41.8%)
				1150calAD - 1182calAD (24.2%)	1117calAD - 1212calAD (53.6%)
IAAA-112323	750 ± 20	91.14 ± 0.25	846 ± 24	1170calAD - 1220calAD (68.2%)	1157calAD - 1257calAD (95.4%)
IAAA-112324	980 ± 20	88.52 ± 0.26	906 ± 26	1045calAD - 1094calAD (38.5%)	
				1120calAD - 1141calAD (14.9%)	1038calAD - 1190calAD (92.5%)
				1148calAD - 1169calAD (14.9%)	1197calAD - 1207calAD (2.9%)

表7

[参考値]

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51 (4), 1111-1150

第V章 総括

今回の発掘調査では、昨年度の発掘調査に引き続き、弥生時代終末期から近世までの集落の遺構を検出した。2カ年の発掘調査によって、高善寺地区に広がる弥生～近代まで断続的に営まれた集落の様相の一端を明らかにすることができた。

ここでは、館本郷II遺跡における各時代の概説と、掘立柱建物について若干の考察を行う。

第1節 館本郷II遺跡の変遷

1 弥生時代～古墳時代

調査区中央北寄りで弥生時代終末期・古墳時代中期の遺構を確認した。弥生時代の遺構は、遺物の特徴から月影～白江期である。過去の発掘調査で検出されている遺構・遺物と同様の遺構が今回も引き続き検出され、弥生の集落が遺跡範囲の南端まで広がることがわかった。しかし、過去の調査結果と比較すると遺構・遺物の密度は薄く、この時期の遺跡の中心は遺跡範囲の北側に広がっていると考えられる。また、古墳時代中期の土坑を検出した。出土した土器の年代は漆町遺跡編年13群併行である。これまで帰農部では、塙野新遺跡や八町II遺跡で同時期の遺構が検出されているが、八尾地域では初めての事例となる。また、遺構は伴わないが、6世紀代の須恵器壺蓋も出土した。

館本郷II遺跡は、史跡上塚・千坊山遺跡群と同時期の遺構・遺物が高い密度で検出されてきたが、今回の調査では古墳時代全般にわたってこの地域で人々が生活していた痕跡を確認した。

2 奈良・平安時代

この調査区での中心となる時期である。検出した遺構の種別は、掘立柱建物2棟、土坑、ピットである。遺構は調査区の西側に集中して分布する。また、調査区西側の自然流路による地形の落ち込みに堆積する黒色の包含層は、出土遺物が上飾器・須恵器で占められており、この黒色土は少なくとも奈良・平安時代までは堆積していたと考えられる。

掘立柱建物S B 2 0は、3間×4間2面廻の柱建物である。柱穴の通りもまっすぐで、建築技術は高い。ある程度規格に則った建物であると考えられる。

また、S B 1 0 4は、1間四方の掘立柱建物である。建物の性格は、柱穴の人さき、深さから推測できる柱の太さ、長さからみて、高さの低い簡易な建物（作業小屋・倉庫）が考えられる。建物の軸がずれており、S B 2 0に伴う遺構ではないと考えられる。

なお、S B 2 0の柱穴から採集した炭化物を年代測定したところ、9世紀後半～10世紀前半の年代を得た。これまでの調査では8世紀～9世紀の遺構が検出されているが、今回の調査では後続する年代の遺構が検出され、集落が存続することを確認した。

3 中世以降

この時期の遺構と判断できるのは溝SD 4 6のみである。SD 4 6は調査区東を南から北にほぼ直線に流れる。遺構の北では狭く浅くなり途切れ、調査区外に続かない可能性もある。遺構埋土を観察すると2層に分けられる。遺物は上層のいろいろな高さから須恵器・中世土師器・越中瀬戸が出土している。下層からは全く遺物が出土していないため、遺構が構築され始めた時期の判断は困難である。上層に様々な時期の遺物が出土しているため、中世～近世の長い期間帶として機能していたと考えられる。当初、屋敷等の区画溝や道路遺構の側溝である可能性も考えられたが、北側で溝が途切れるごと、サブトレンチの断面観察で整地した痕跡は見られなかったことから、可能性は低いと考えられる。

また、溝周辺には他の遺構もあったが、後世に削平された可能性が高く、この時期全体の様相は掘

み切なかった。

4 遺跡における各時代の遺構の分布

調査区全体の旧地形は、東から西へ緩やかに傾斜し、調査区の西側には南東から北西に流れる自然流路と見られる地形の落ち込みがある。東側は、過去に削平を受けている可能性が高い。

本遺跡では、平成8年度調査区では弥生時代終末期の遺構・遺物と8~9世紀代の遺構・遺物がかなりの密度で検出されている。昨年度の調査では、A区中央を横切るように疊層が堆積し、疊層上面からは様々な時期の遺物が出土した。このことから調査区中央の疊層は古代から近世までの長い期間河川か河原であったと推測される。つまり、弥生時代終末期には集落の中を小河川が流れ、それら小河川が埋まって古代~中世の遺構が形成されたという変遷が考えられる。

また、弥生時代は遺跡範囲の北側が遺構・遺物とも密度が高い。古代では8世紀代は弥生時代の遺構分布と重複するが、9~10世紀になると遺跡の中央や南側にも遺構・遺物が分布すると考えられる。

第2節 挖立柱建物SB20の検討

1 建物の構造について

掘立柱建物SB20は、4間×3間の総柱建物である。建物の面積は、 $8.4\text{m} \times 10\text{m} = 84\text{m}^2$ である。柱間寸法は、桁行が北から27m、29m、27m、梁行が西から26m、24m、24m、26mである。SP1とSP4の梁間寸法が0.1m短く不規則であり、他の柱穴と比較してSP19の深さが浅い。

建物の東南隅の柱穴が調査区外になるため、桁行が3間以上になる可能性もあるが、以上の点を踏まえて建物の規模・構造を検討すると、方位はN~10°~Eで南北棟の桁行3間×梁行4間二面廊の建物が想定できる。

これは、古代の建物は例外を除けば梁行が2間であること、SP4の柱間寸法がやや短いことと、SP19が浅いことを考慮し、この2つの柱が廊になる平面構造を検討した結果である。建物の身舎は3間×2間となる。建物の構造は、梁行の柱の通りが整っているため、柱の上にまず梁を渡し、その上に桁でつなぐ折置組であると推測される。屋根の形式は、屋内の柱も外側の柱も同じ深さであることから棟持柱であると想定すると、寄棟造や入母屋造は外側の棟持柱が邪魔になるため、切妻造と考えた。瓦は出土していないため、板葺や茅葺などが想定される。以上からSB20の断面透視図(図7)を作成した。

この他に、東西棟の4間×3間で東と南に廊をもつ建物を想定した。身舎は同じ3間×2間である。この場合、建物の構造は、先に桁を渡しその上に梁を置く京呂組となる。しかし、身舎より廊の柱穴が深くなったりするため、建物の構造上無理があると推測される。

SB20については柱穴に伴う遺物がわずかであり、遺構の時期判断の補強のため、柱穴から採集した炭化物を分析し年代測定を実施したところ、9世紀後半~10世紀前半の年代を得た。

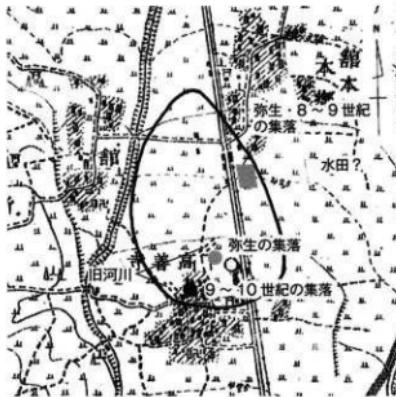


図6 集落分布の推定図 (S=1/15000)

2 建物の性格について

S B 2 0は、身舎の梁行が2間で庇を持つこと、柱穴の通りがしっかりとしいること、方位が南北に忠実であることから、規格に則った建物を建築しており、その点で古代の役所的であるといえる。

しかし、県内の官衙とされる掘立柱建物の発掘事例と比較すると、他に建物が伴わないこと、墨書き器や硯などの遺物が全く出土していないこと、柱穴が小さいことなどから、現時点では官衙遺構とはすることはできない。

山中敏史氏は、総柱建物の多くは高床倉庫であると指摘している。

また遺跡周辺が「高善寺」という地名である。現在のところ地名と寺院の関連を示す伝承や研究成果はないが、寺院関連の建物である可能性も考慮しておきたい。

今後遺跡周辺での調査事例が増え、建物の情報が蓄積した時点で、この建物の性格について再度検討を行いたい。

<引用・参考文献>

- 岸本雅敏 1986 「V 新町II遺跡の古代掘立柱建物群の性格」「新町II遺跡の調査」姫川町教育委員会
- 越前慎子 1996 「第Ⅳ章 考察 1 梅原胡摩堂遺跡出土中世土器の編年」「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」第一分冊 財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査室事務所
- 田嶋明人 1986 「V 考察 一塗町遺跡出土土器の編年的考察ー」「塗町遺跡I」石川県立埋蔵文化財センター
- 樺井一郎 1995 「11 (3) 中世後期の貿易陶磁器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編
- 富山市教育委員会 2008 「富山市富崎遺跡発掘調査報告書」富山市埋蔵文化財調査報告21-1(1)
- 富山市教育委員会 2011 「富山市猪木郷II遺跡発掘調査報告書」富山市埋蔵文化財調査報告43
- 奈良文化財研究所 2003 「古代の官衙遺跡 I 遺構編」
- 奈良文化財研究所 2004 「古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編」
- 藤田富士夫 2002 「2. 古代姫負郡の「郷」概念と衝谷南遺跡の位置」「富山市橋谷南遺跡発掘調査報告書III」富山市埋蔵文化財調査報告125
- 姫川町教育委員会 2002 「富山県姫川町 千坊山遺跡群試掘調査 報告書」
- 姫川町教育委員会 2003 「富山県姫川町 犬城治町遺跡発掘調査報告」
- 文化庁文化財部記念物課 2010 「発掘調査のてびき」
- 八尾町教育委員会 1996 「翠尾I 遺跡試掘調査要領」
- 八尾町教育委員会 1997a 「翠尾I 遺跡発掘調査報告書1」「八尾町埋蔵文化財調査報告第11集」
- 八尾町教育委員会 1997b 「富山県八尾町 翠尾I 遺跡発掘調査報告(2)」「八尾町埋蔵文化財調査報告第12集」
- 八尾町教育委員会 1997c 「富山県八尾町 薄尾立跡、翠尾I 遺跡、妙川寺遺跡試掘調査報告」「八尾町埋蔵文化財調査報告第13集」
- 八尾町教育委員会 1998a 「富山県八尾町 翠尾I 遺跡発掘調査報告(3)」「八尾町埋蔵文化財調査報告第16集」
- 八尾町教育委員会 1998b 「翠尾I・翠尾II 遺跡試掘調査報告(3)」「八尾町埋蔵文化財調査報告第17集」
- 八尾町教育委員会 1999 「富山県八尾町 翠尾I 遺跡発掘調査報告(4)」「八尾町埋蔵文化財調査報告第18集」
- 八尾町教育委員会 2000 「富山県八尾町埋蔵文化財分布調査報告I 1999年度」「八尾町埋蔵文化財調査報告第22集」
- 山本信夫 1995 「11 貿易陶磁器 [2] 中世前期の貿易陶磁器」「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社

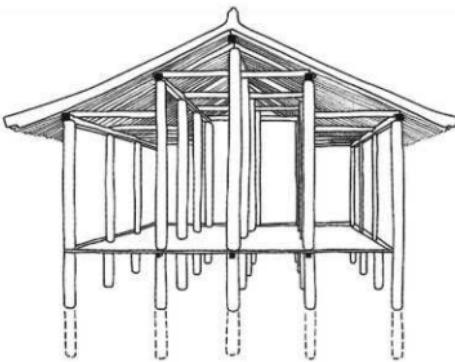


図 7 S B 2 0 断面透視図

(松本修自 2003 「II-2 軸部と屋根 図13 掘立柱二面廊建物モデル断面透視図」『古代の官衙遺跡I 遺構編』奈良文化財研究所を参考に改変・作成)

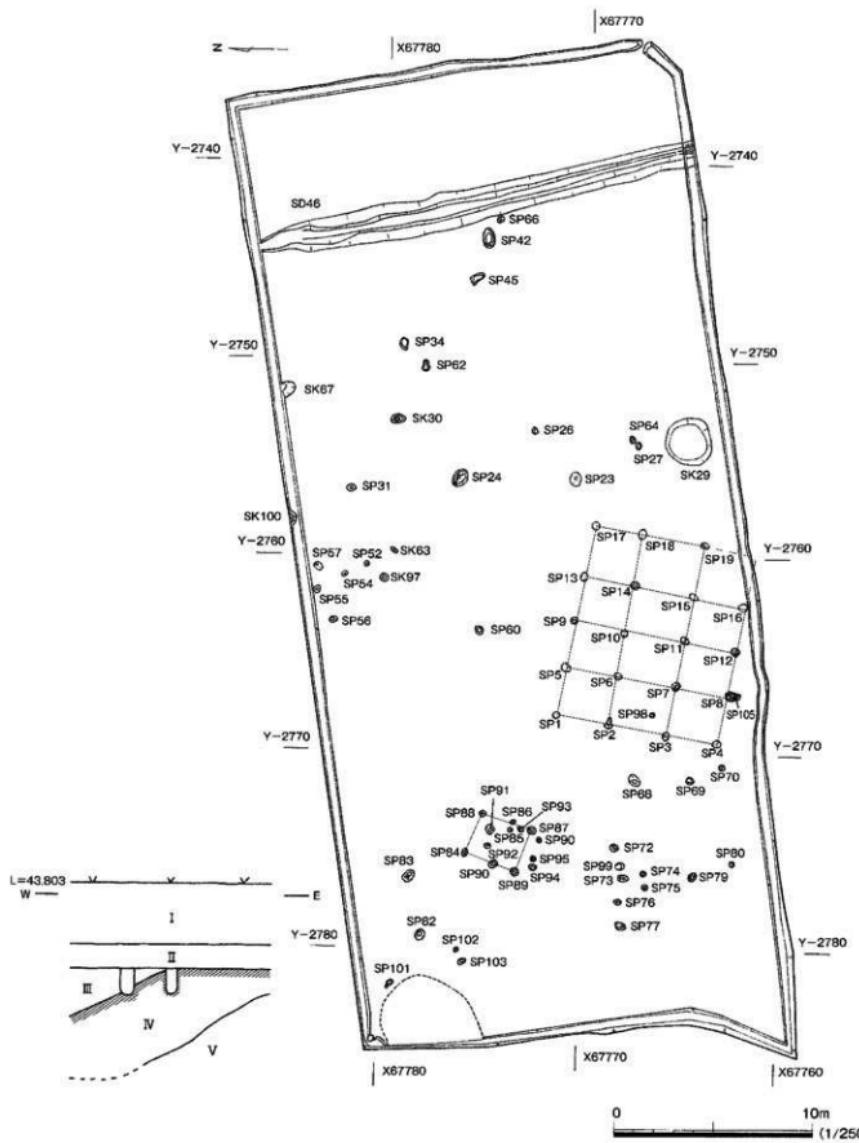


図8 遺構配置図 (S=1/250) および層序模式図 (断面のみ S=1/20)

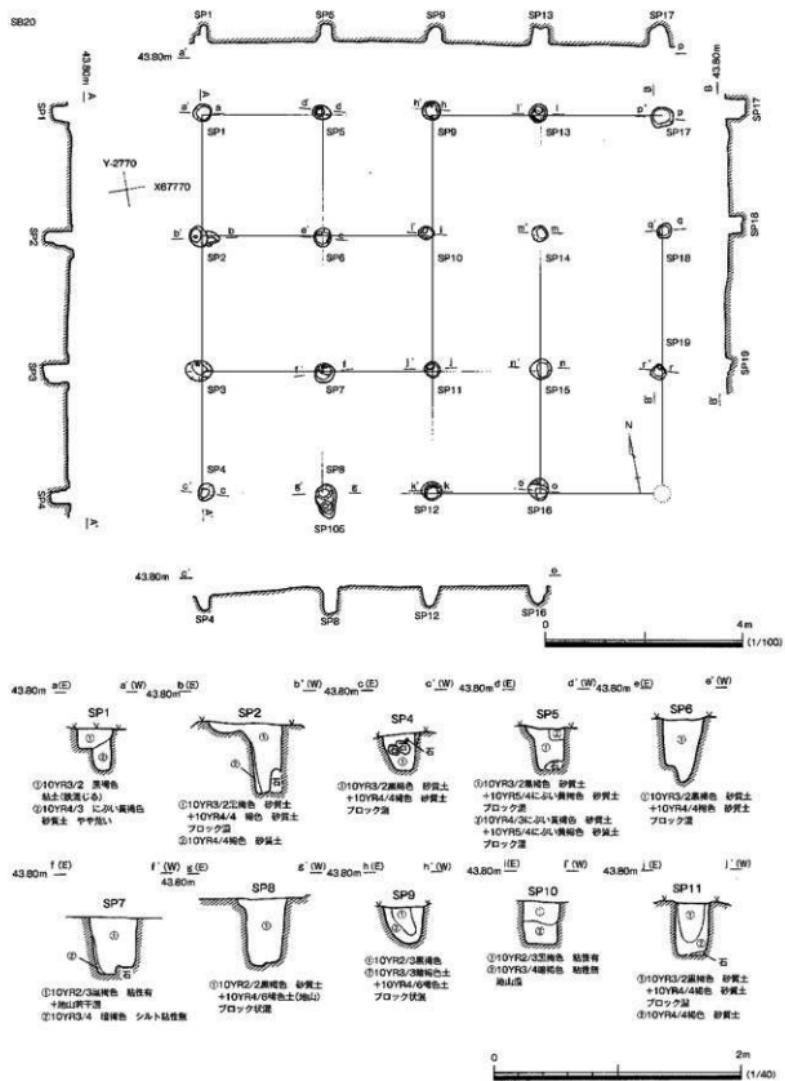


図9 SB20 平面図エレベーション図 ($S = 1/100$)、断面図 ($S = 1/40$)

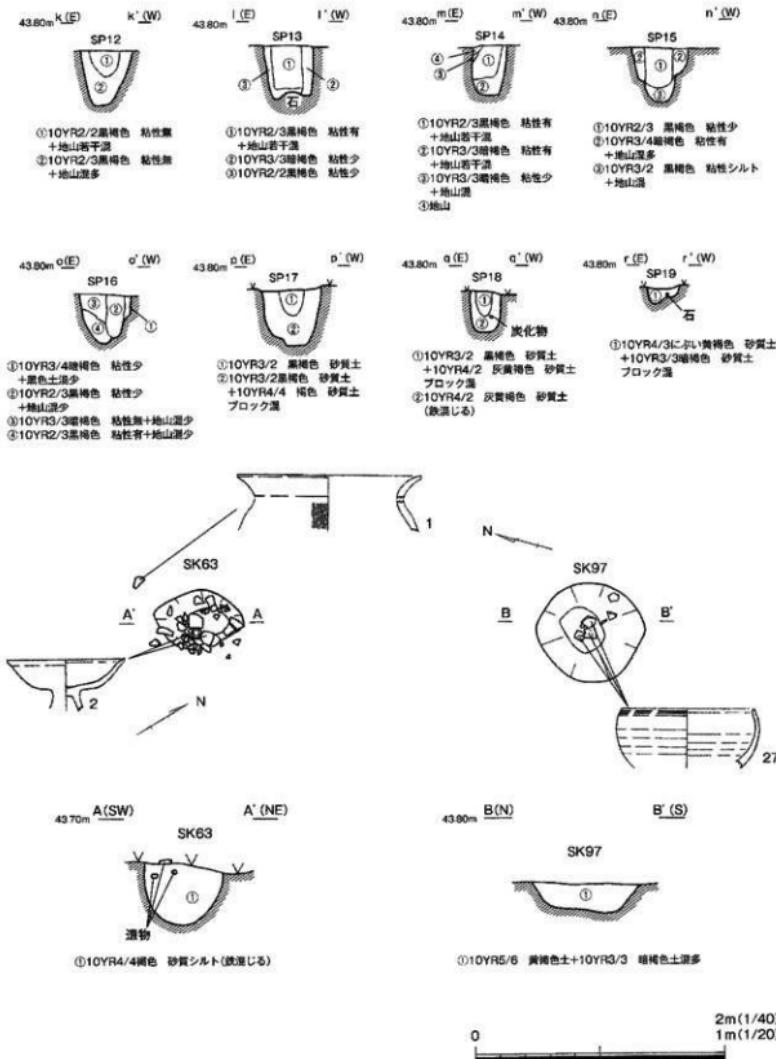


図 10 SB20 断面図、SK63・SK97 遺構平面図・遺物出土状況図・断面図
(SB20 は S=1/40、SK63・SK97 は S=1/20、遺物実測図は S=1/6)

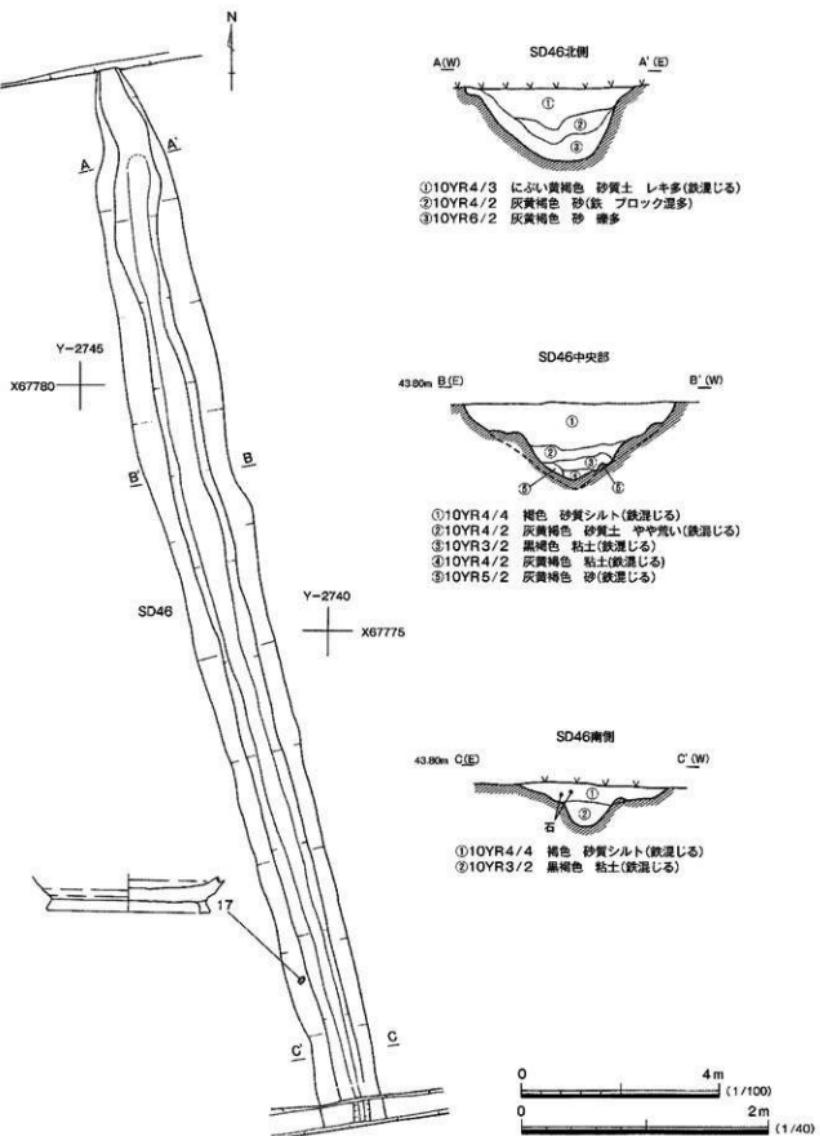


図 11 SD46 平面図・断面図 (平面図は S=1/100、断面図は S=1/40、遺物実測図は S=1/6)

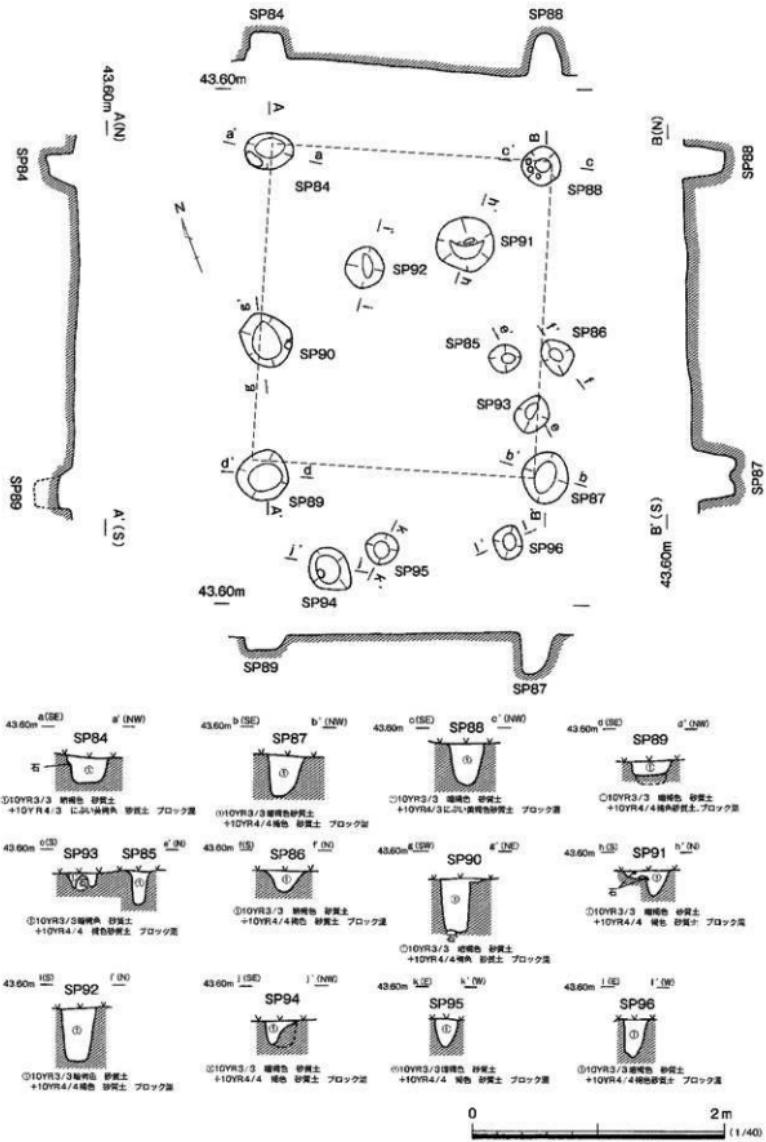


図 12 SB104 平面図・エレベーション図・断面図 (S=1/40)

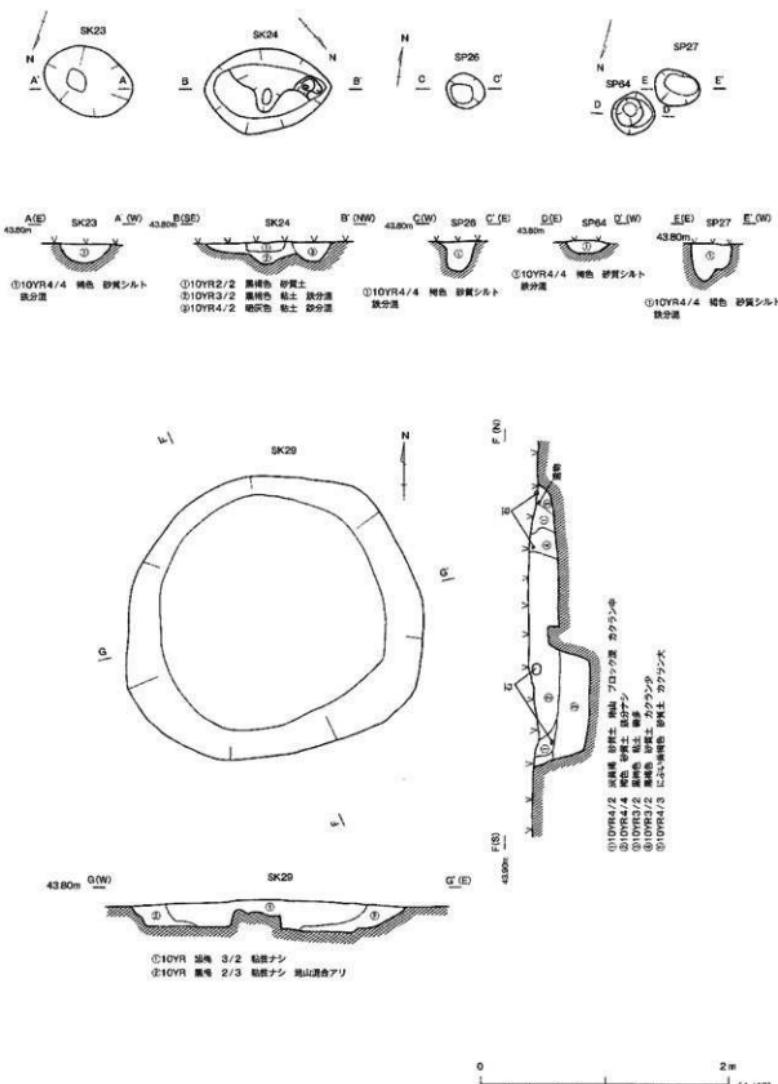


図 13 遺構平面図および断面図 (S=1/40)

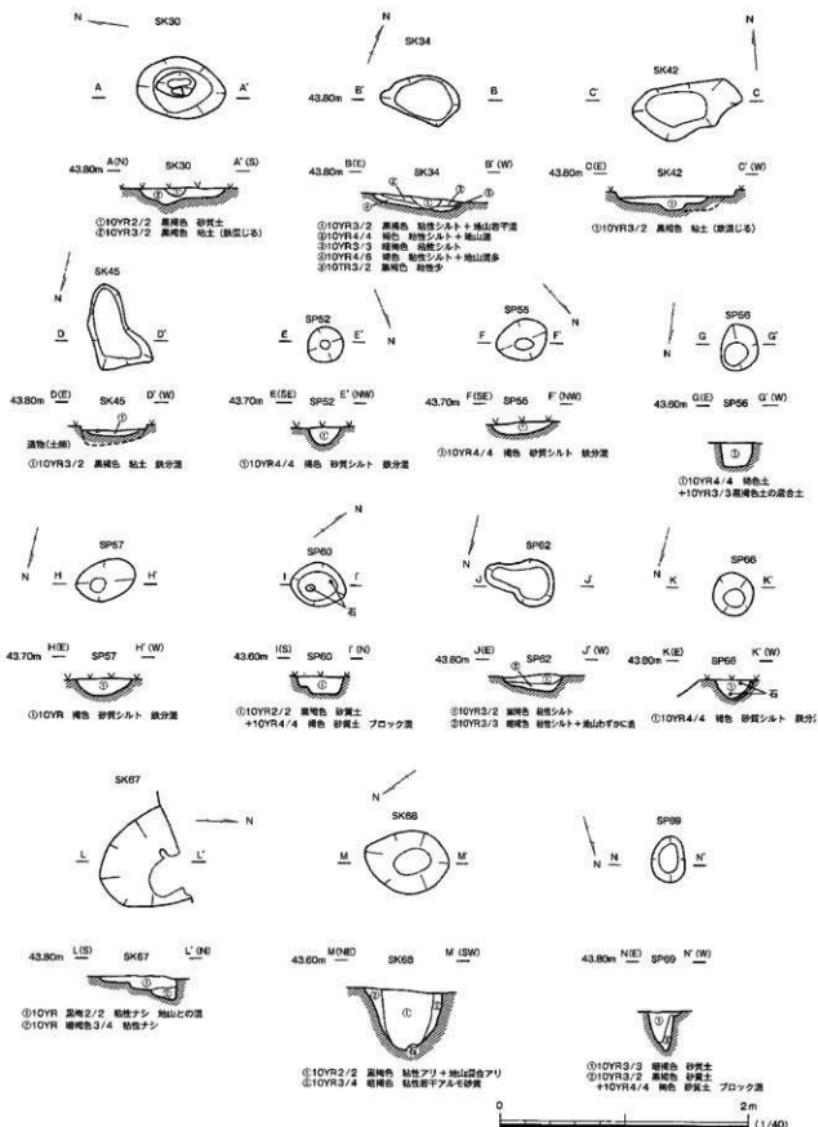


図 14 造構平面図および断面図 (S=1/40)

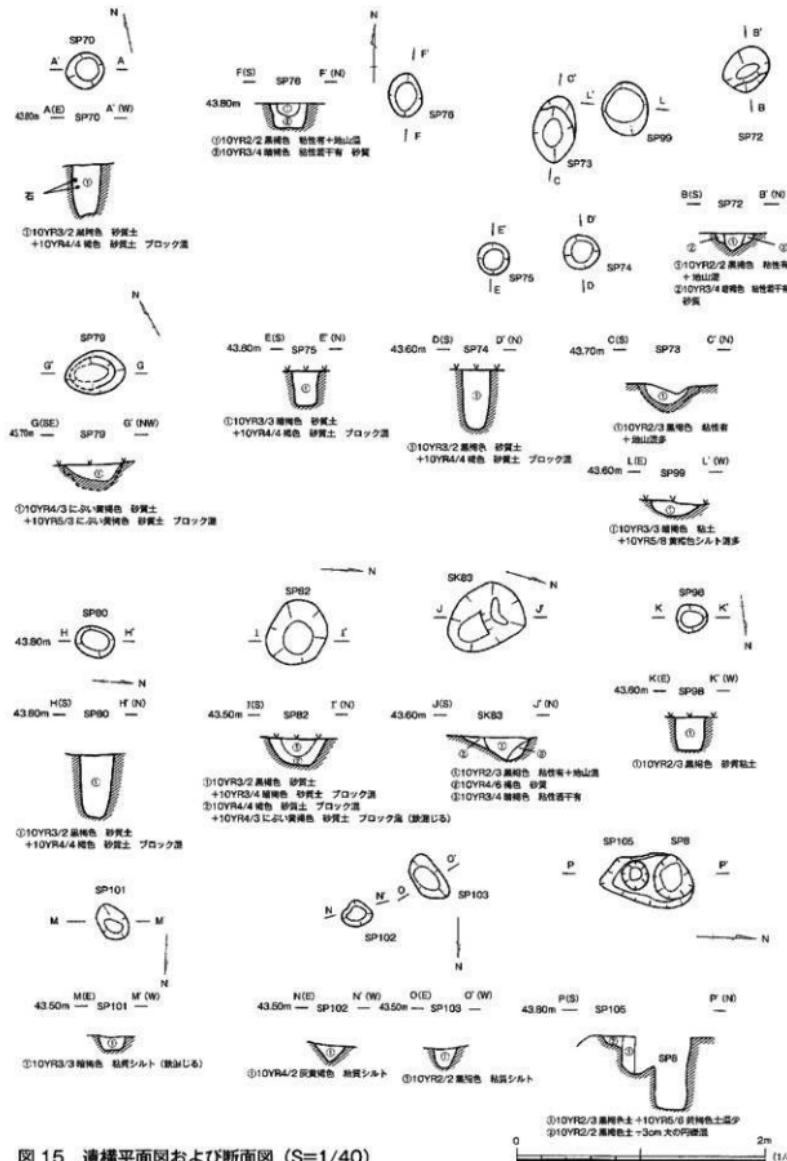


図 15 造構平面図および断面図 (S=1/40)

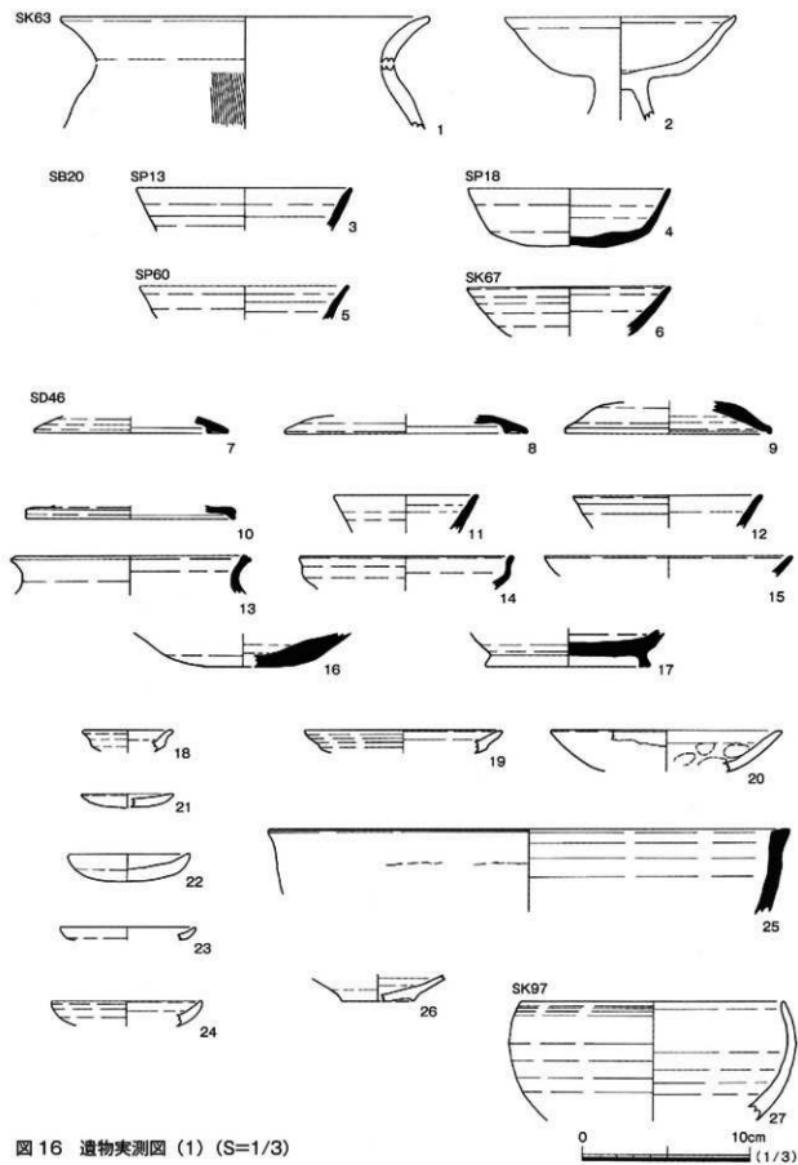


図 16 遺物実測図 (1) (S=1/3)

包含層その他

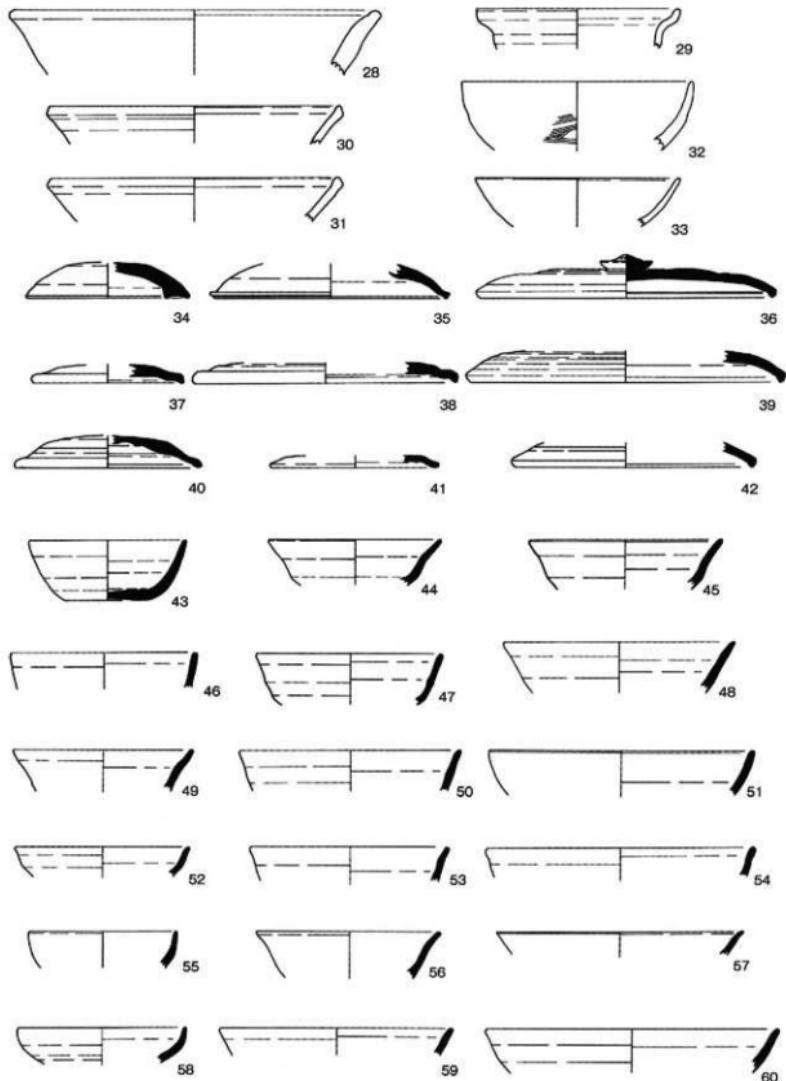


図 17 遺物実測図 (2) (S=1/3)

0 10cm
(1/3)

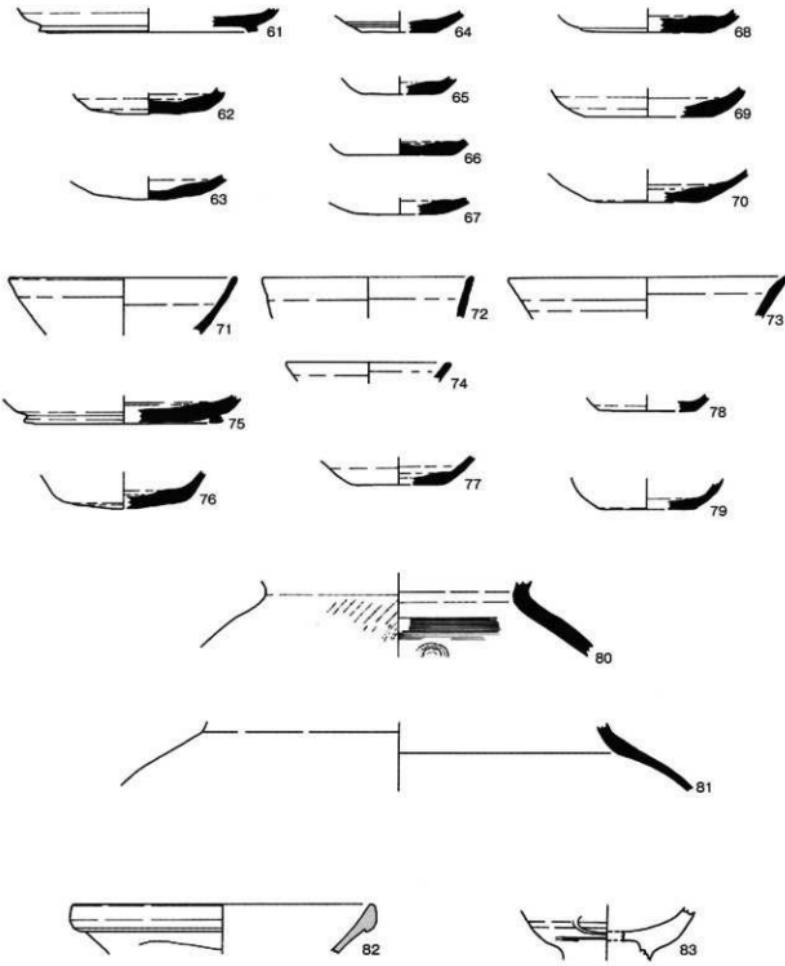


図 18 遺物実測図 (3) ($S=1/3$)

0 10cm
(1/3)

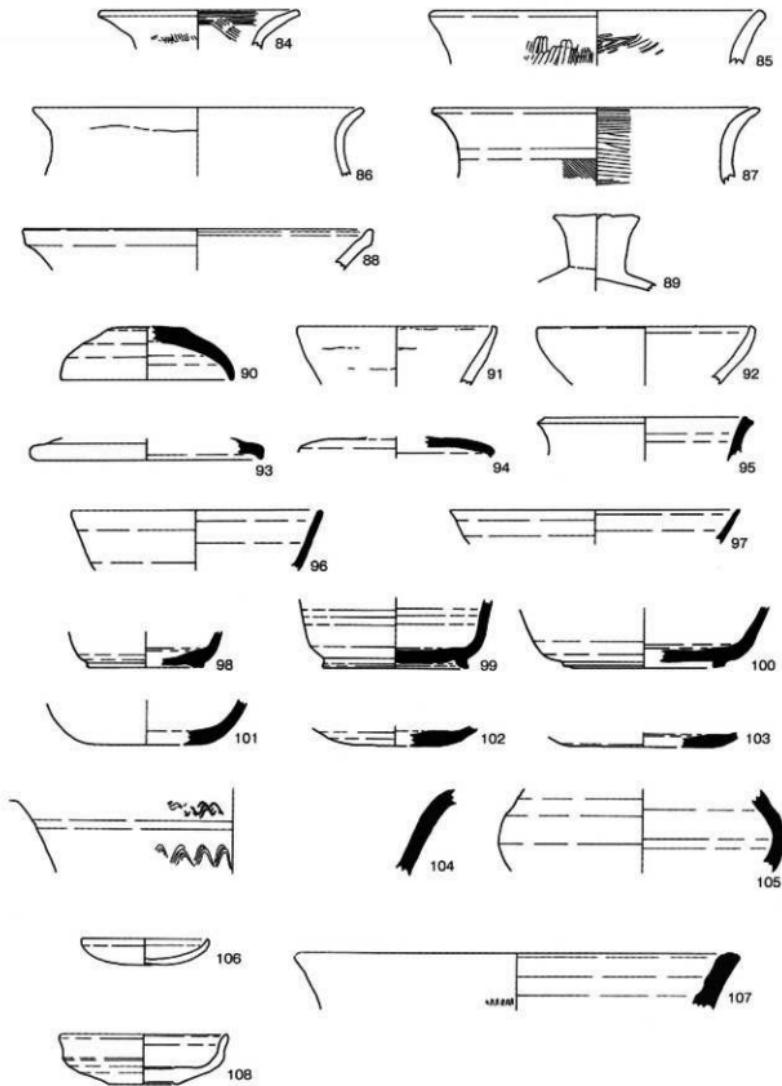


図 19 遺物実測図 (4) (S=1/3)

0 10cm
(1/3)

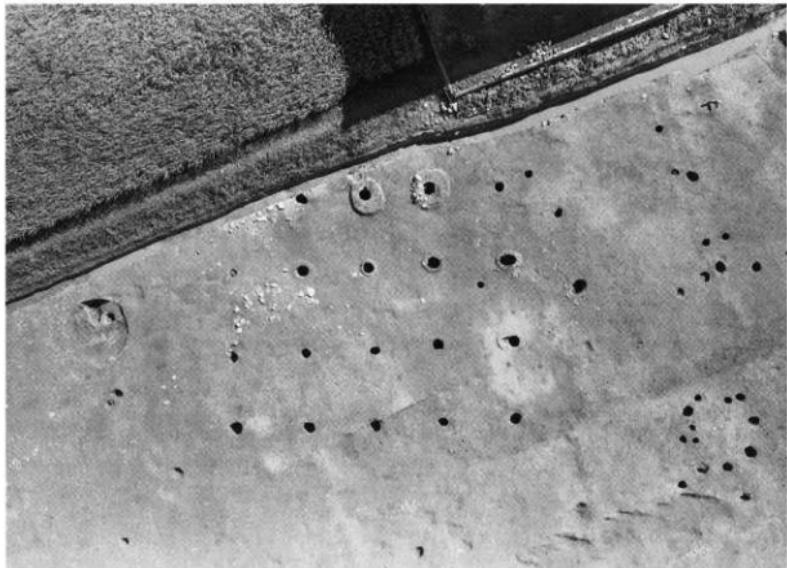


航空写真（1961年国土地理院撮影・上が北）





掘立柱建物完掘状況（西から）



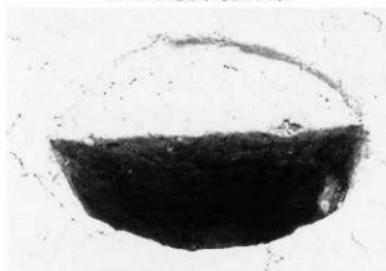
S B 20 空中写真（上から）



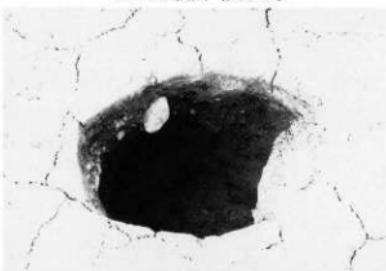
SB 20 検出（東から）



SB 20 検出（西から）



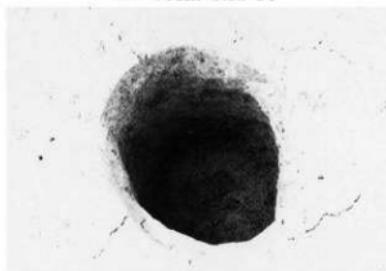
SP 3 断面（北から）



SP 3 完掘（北から）



SP 4 断面（北から）



SP 4 完掘（北から）



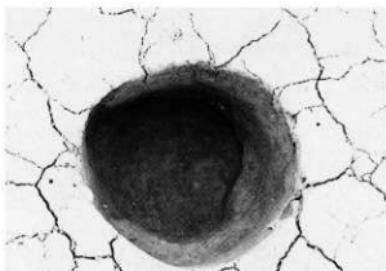
SP 8 断面（北から）



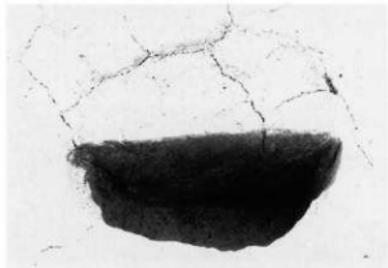
SP 8 完掘（西から）



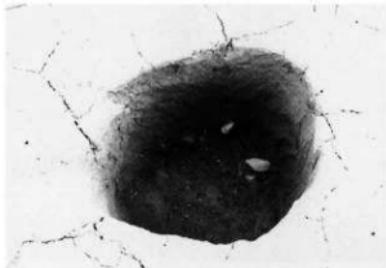
SP 12 断面（北から）



SP 12 完掘（北から）



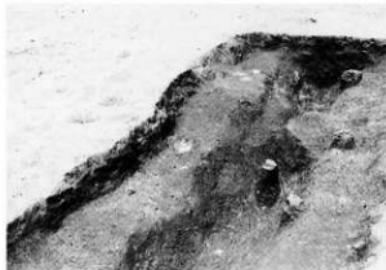
SP 17 断面（北から）



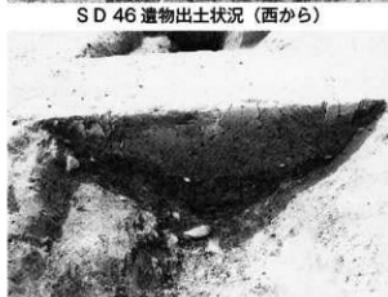
SP 17 完掘（北から）



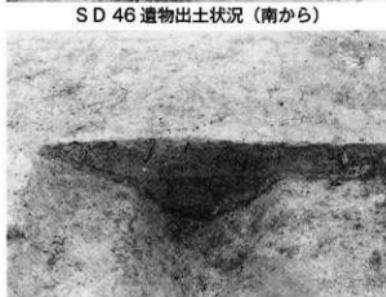
SD 46 遺物出土状況（西から）



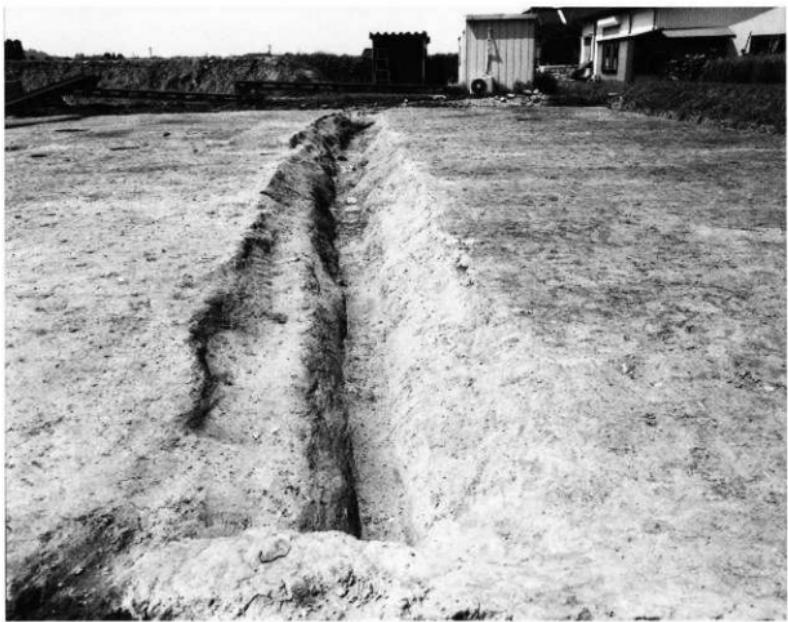
SD 46 遺物出土状況（南から）



SD 46 北断面（北から）



SD 46 南断面（北から）



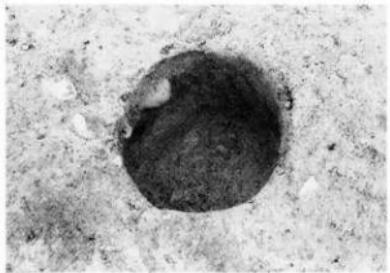
S B 46 完掘（上：南から、下：北から）



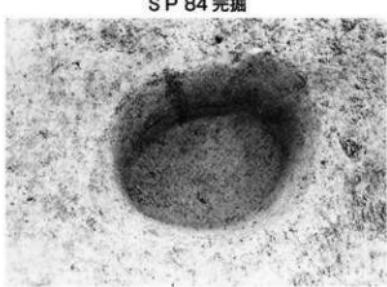
S B 104 完掘（南から）



S P 84 完掘



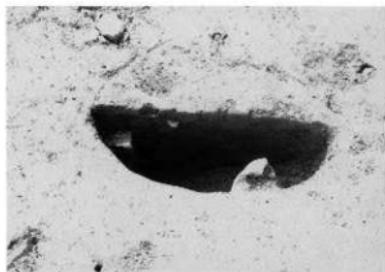
S P 87 完掘



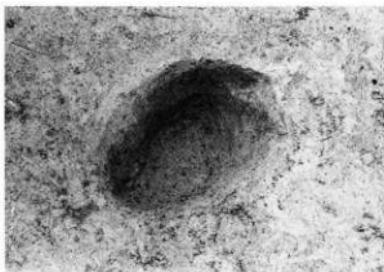
S P 89 完掘



S P 88 完掘



SK 63 断面（西から）



SK 63 完掘



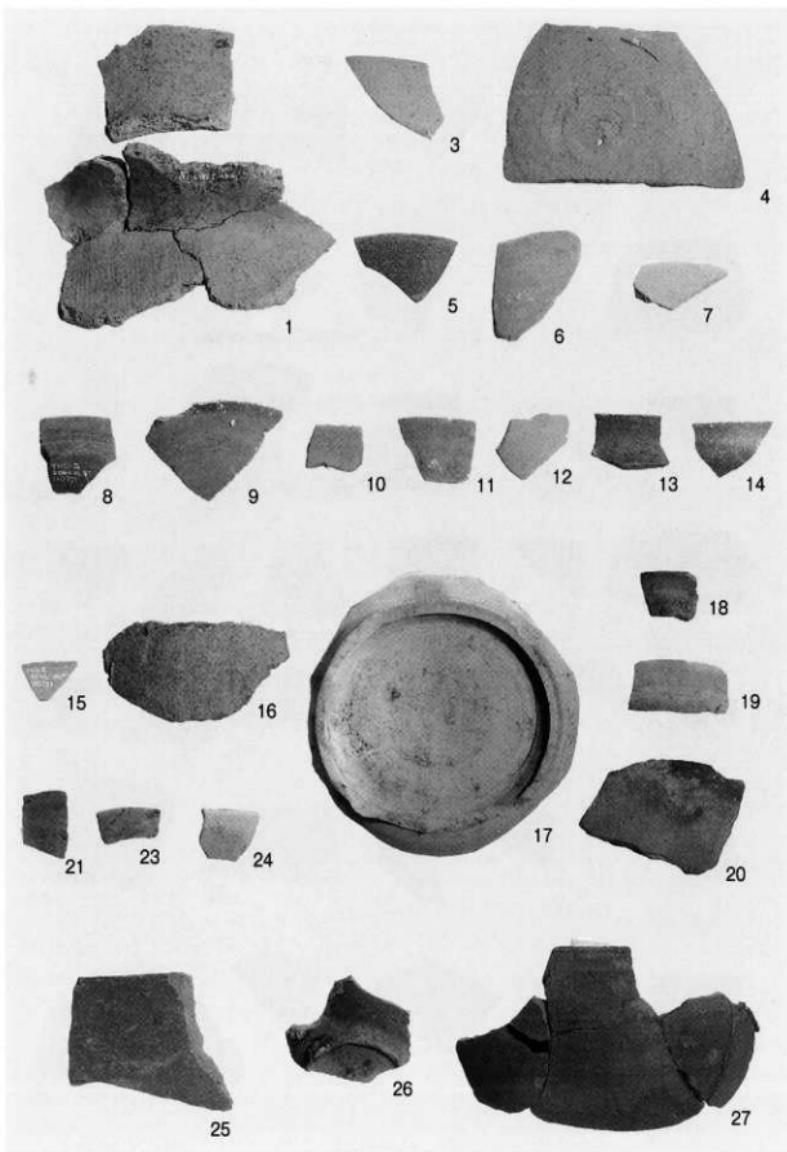
SK 29 完掘（南から）



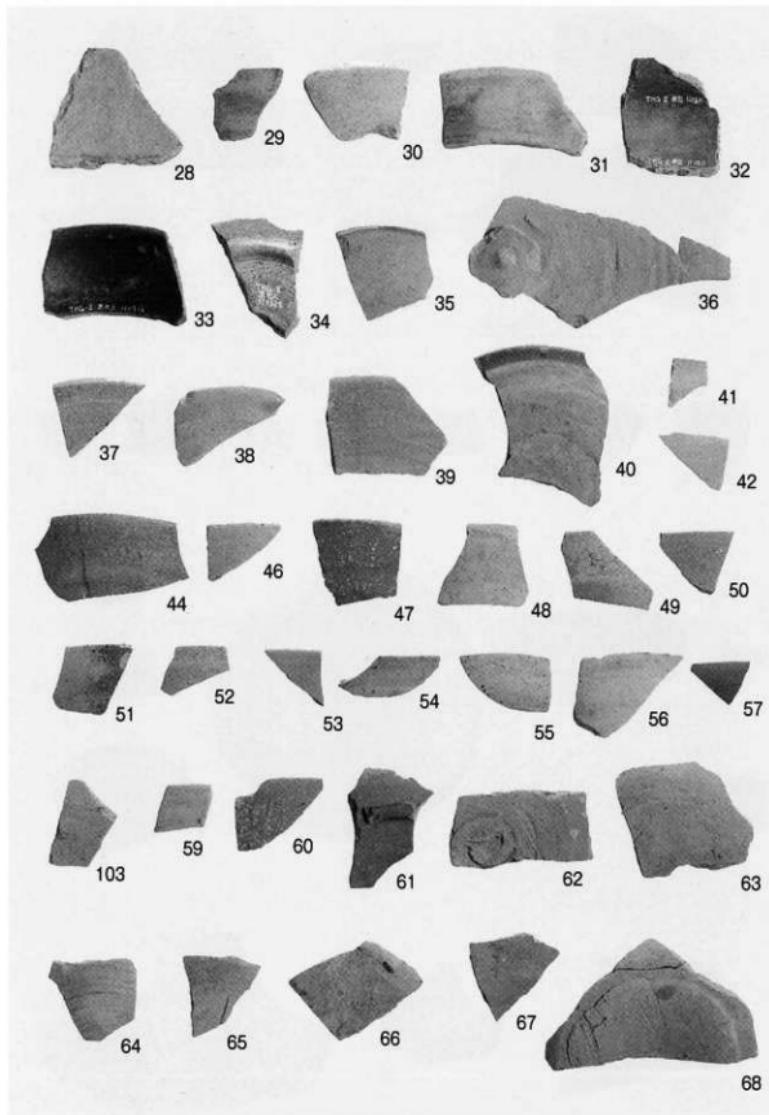
自然流跡（西から）



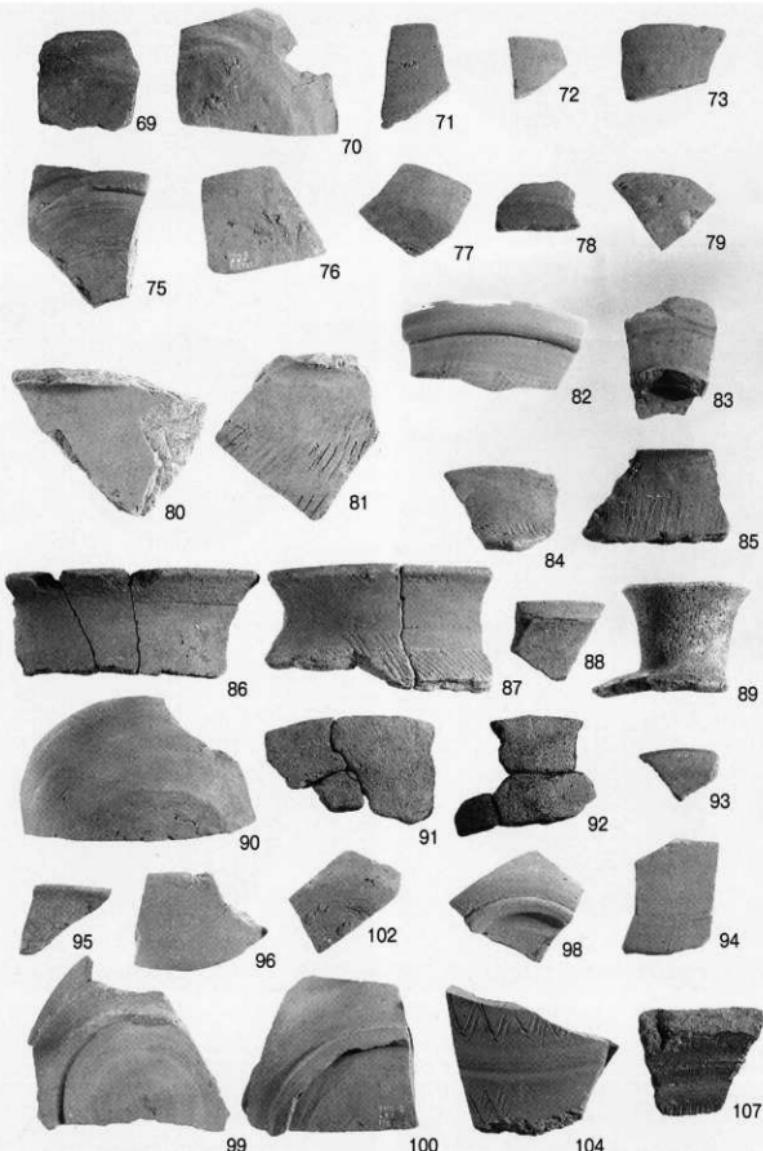
自然流跡（南東から）



遺構出土遺物写真（数字は実測図番号と一致する）



包含層その他出土遺物写真（1）



包含層その他出土遺物写真(2)

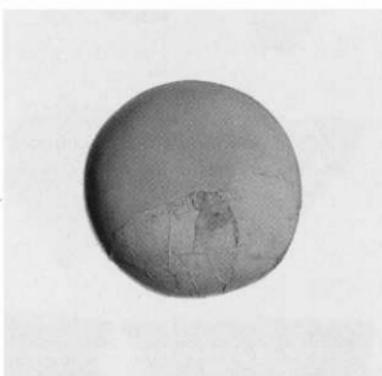
12



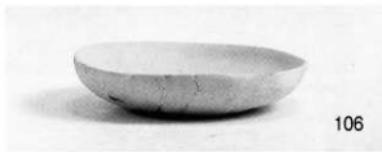
2



43



22



106

出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	とやましたちほんごうにいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山市館本郷II遺跡発掘調査報告書							
副書名	経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業） 高善寺地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次	(2)							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	47							
編著者名	細江嘉門							
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
編集機関住所	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 Tel. 076-442-4246							
発行年月日	西暦2012年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 N.L.	東經 E.L.	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
館本郷II 遺跡	富山市八尾町 高善寺地内	市町村 16201	遺跡番号 361068	36度 36分 41秒	137度 08分 11秒	平成23年6月16日 ～9月30日	1198.7	県営ほ場 整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
館本郷II 遺跡	集落	弥生時代 終末期	土坑	弥生土器				
		古墳時代中期	土坑	土師器				
		古墳時代後期		須恵器				
		古代	掘立柱建物2、土坑、ピット	土師器・須恵器				
		中世～近世	溝、土坑	珠潤・中世土師器・越中瀬戸・白磁				
要約	<p>弥生～近世まで断続的に営まれた集落の遺構を確認した。</p> <p>弥生時代終末期の遺構は土坑がある。遺跡北側に所在する弥生時代集落が、遺跡の南端まで広がることが確認された。</p> <p>古墳時代中期の土坑を確認した。出土した土師器高杯の時期は漆町遺跡13群土器併行である。この地域における当該期の遺構・遺物は初の確認となる。</p> <p>平安時代の遺構は、掘立柱建物2、土坑、ピットを確認した。3間×4間2面庇付きの組柱建物は、身舎の梁行が2間で扉を持つこと、柱穴の通りがしっかりしていること、方位が南北に忠実であることから、規格に則った建物を建築しており、役所的であるといえる。</p> <p>掘立柱建物の柱穴から採取した炭化物のC14年代測定では、9世紀後半～10世紀前半の年代を得られた。</p> <p>調査区東で検出した溝は、2時期に分けられる。遺物は上層からのみ須恵器・中世土師器・越中瀬戸が出土した。下層からは全く遺物が出土しないため、溝が構築された時期は不明であるが、中世～近世の開溝として機能していたと考えられる。</p>							

富山市埋蔵文化財調査報告 17

富山市館本郷 II 遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（県営は場整備）
高善寺地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）

発行日 2012（平成 24）年 3 月 19 日

発行機関 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒 930-0091

富山市愛宕町 1丁目 2-24

Tel 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 塚 株式会社 なかたに印刷

